



靖国神社今年の干支「子」



第129号

公益財団法人 特攻隊戦没者
慰霊顕彰会
編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言	岩崎 茂	2
慰霊祭等参加報告		
十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭	倉形桃代	3
長野縣護國神社特攻勇士之像慰霊祭	倉形桃代	4
令和元年度明野忠魂塔慰霊祭	倉形桃代	5
フリーピン特攻基地平和式典	及川昌彦	6
神風特攻敷島隊五軍神慰霊追悼式	宮本雅史	7
大阪護國神社特攻勇士慰霊祭	金子敬志	9
埼玉県特攻勇士の像慰霊祭	石井光政	10
回天烈士追悼式	秋山政隆	12
若潮慰霊祭	鮎田英一	14
若潮慰霊祭	金子敬志	12
海上挺進第八戦隊及び基地第八大隊	中溝二郎	15
海上挺進第八戦隊第二中隊比島戦記録	小島少尉	17
海上挺進第九戦隊及び基地第九大隊	中溝二郎	22
私の戦時体験	菅原謙吾	25
甲15土空24分隊名残の会のお知らせ	池田康博	42
第一空挺団研修に参加して	池田康博	43
新刊図書紹介「鉛筆部隊と特攻隊」	池田康博	46
連載 山ある記9	池田康博	47
文芸欄 歌俳柳の広場		
短歌・俳句・川柳		48
事務局からの報告等		
平成31年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告		49
第41回特攻隊全戦没者慰霊祭の開催について		49
令和2年度年会費納入について		49
寄付者等の報告		51
挿絵提供	空自OB	
	宇山氏	



2月巻頭言

副理事長 岩崎 茂

新年が明け既に1ヶ月過ぎようとしておりますが、皆様方如何お過ごしでしょうか？

私ごとですが、最近、私は所謂葉書での年賀状は失礼し、私がこれまでお世話になった方々にメールで年末及び新年の挨拶をさせて頂いております。令和元年の年末や令和2年元日までに北朝鮮からのプレゼント？がなかったことから、元日の午後（米国東部時刻で新年）に、一部の方々に「穏やかな新年をお迎えるのとと・・・」とメール致しました。が、翌日、私のもとに私の親友の訃報が届きました。台湾の現役参謀総長である沈一鳴 空軍大將が部隊視察の為UH-60で

松山飛行場から宜蘭にある部隊へ移動中に墜落し亡くなったとの電話でした。その翌日には、イラン革命防衛隊のソレイマニ司令官が米国の無人機による空爆で殺害され、それに続くイラン国内から発射されたと思われる弾道弾がイラクに所在する米軍施設へ着弾したとの報道がされました。昨年は我が国にとって大変災害の多い年でした。多くの方々は今こそは平和で災害の少ない良い年である事を願いつつ迎えられることと思いますが、私にとってはショッキングな令和2年の幕開けとなりました。

時々「コンドラチェフの波」という言葉や「ロシアの著名な経済学者です。景気循環の長期的（40-60年）な振れのことですが、時々政治的なことや国際関係的なことでも使われることがあります。冷戦終結後、全世界の人々は漸く安心できる平和な世界が実現すると考えておりました。そして世界の各地でグローバルな動きが叫ばれましたが、ここ数年の世界の動きは、これまでとは異なり、保護主義、自国中心主義、内向きの傾向が顕著に出てきており、不安定な方向にまっしぐらに走っているように感じられます。

このベクトルが上向きになるのに、またかなりの時間を要するのでしょうか？

このような中、我が国は昨年5月に御代替わりをし、「平成」から「令和」となりました。「令和」の「令」は、「よき事、めでたい事、そして他人を尊敬する（労わる）意味（例…ご令嬢・令夫人等）」があるそうです。また、私は、「平成」の英語表記に関してはお存じありませんが、今回の「令和」の英語表記は Beautiful Harmony だそうです。でも、英語の Beautiful Harmony を和訳すると、多分一般的には「美しい調和」となるのではないかと思います。Beautiful には「品のある」とか「立派な」と言う意味もあります。日本語の「令和」も「Beautiful Harmony」の英語名もとても素晴らしいお言葉を元号にされたと思っています。何か殺伐とした世界の中で、我々は今こそ、この「令和の心」つまり「品のある調和」や、「他人や相手を尊敬する心」、「相手を思いやる心」を世界に広め、少しでも世界の緊張度を下げ、争いのない世界に向け活動すべき時ではないでしょうか？

特攻隊員の方々が出撃命令を受けた時や出撃の時の愛機への搭乗時、また離陸

時に特攻隊員の方々は何を感じていたのでしょうか？特攻隊員の遺書や伝記等で彼らの心情の一端を知り得ることは可能ですが、果たして本心ほどの程度出たのでしょうか？私は、非常に複雑な思いで書かれたのではと思っております。しかし、多くの特攻隊員はいろいろな思いを心の中に秘めながら、でも笑顔で飛び立っていきました。私は彼らのこの落ち着いた態度や冷静さ、そして紳士的な態度に武士道や品性、そしてご両親やご家族、そして地域に対する尊敬や思いやりを感じます。当に「令和の心」です。

我々が現在享受している豊かな生活や繁栄そして平和な毎日、こうした特攻隊員のご英霊のお蔭でと言っても過言ではないと思っております。

今年、令和2年は終戦から75年になります。節目に当たる年を迎え、「令和の心」をもって、特攻勇士のご英霊に感謝をしつつ、彼らの思いに少しでも近づき、彼らの偉業を後世に語り継いでいくことが我々の使命と再認識し、今年も各種活動に参加していきたいと考えております。皆様方からの益々の熱いご支援とご協力を賜らんことを切にお願い申し上げます。



記念館正面入り口

当日の鹿児島は、強い台風15号襲来の最中であつたが、慰霊祭の間は時折雨が強くなる位で、暴風雨とはならなかつた。昨年、主催者である霧島高原ビル株式会社社長の山元正博氏が「次の慰霊祭までに敷地内に残る海軍の掩体壕を整備して、訪れる人に見て頂けるようにする予定です。」と仰つておられたお言葉通り「十三塚原特攻記念館」を完成させ、慰霊祭後に開館のテープカットも行われ、お披露目された。

参列者は、中重真一霧島市長をはじめ、地元有志を中心に約70名であつたが、記念館の完成を取材する為に、NHK・地元のテレビ局はじめ多くの報道陣も集まった。台風で交通機関が滞る中、参列できなくなつたご遺族もいらつしやつたが、加治木島津家13代当主で、精矛神社宮司の島津義秀氏を斎主として慰霊祭は厳かに斎行された。社員の方々による遺書の朗読や野太刀自頭流奉納も行われた。

山元会長は慰霊祭、掩体壕の整備・公開について「もっと多くの方々に特攻隊の存在を知って頂きたいと思ひ、記念館を作り掩体壕の修復をしました。戦後75年を経過して、傷みも酷く崩落の危険がある為、補強工事をして、外から見られるようにしました。一民間企業のやることで大々的ではありませんが、生きたくても生きられなかつた若者の思いを、今の若い人達に感じて欲しい。我々一人ひとりと、今生きている事に感謝をして命を大切に生きる事が、飛び立たれた英霊に対する感謝だと思ひます。」と、切々とお気持ちを語られた。慰霊碑がある場所から階段を下りた場所に完成した記念館がある。中には霧島市から提供を受けた特攻隊員の遺影や遺書・ご家族の手記をパネルにした展示があり、多くの参列者

第21回十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭

評議員 倉形 桃代

令和元年8月15日、鹿児島空港近くに所在する霧島高原ビル株式会社（鹿児島霧島市溝辺町）の敷地内、嘗ての海軍分第二基地跡地に建立された慰霊碑前で、十三塚原神風特別攻撃隊慰霊祭が斎行された。今年で21回目になる慰霊祭に、昨年に引き続き理事長代理として参列した。

当日の鹿児島は、強い台風15号襲来の最中であつたが、慰霊祭の間は時折雨が強くなる位で、暴風雨とはならなかつた。

昨年、主催者である霧島高原ビル株式会社社長の山元正博氏が「次の慰霊祭までに敷地内に残る海軍の掩体壕を整備して、訪れる人に見て頂けるようにする予定です。」と仰つておられたお言葉通り「十三塚原特攻記念館」を完成させ、慰霊祭後に開館のテープカットも行われ、お披露目された。

参列者は、中重真一霧島市長をはじめ、地元有志を中心に約70名であつたが、記念館の完成を取材する為に、NHK・地元のテレビ局はじめ多くの報道陣も集まった。台風で交通機関が滞る中、参列できなくなつたご遺族もいらつしやつたが、加治木島津家13代当主で、精矛神社宮司の島津義秀氏を斎主として慰霊祭は厳かに斎行された。社員の方々による遺書の朗読や野太刀自頭流奉納も行われた。

山元会長は慰霊祭、掩体壕の整備・公開について「もっと多くの方々に特攻隊の存在を知って頂きたいと思ひ、記念館を作り掩体壕の修復をしました。戦後75年を経過して、傷みも酷く崩落の危険がある為、補強工事をして、外から見られるようにしました。一民間企業のやることで大々的ではありませんが、生きたくても生きられなかつた若者の思いを、今の若い人達に感じて欲しい。我々一人ひとりと、今生きている事に感謝をして命を大切に生きる事が、飛び立たれた英霊に対する感謝だと思ひます。」と、切々とお気持ちを語られた。慰霊碑がある場所から階段を下りた場所に完成した記念館がある。中には霧島市から提供を受けた特攻隊員の遺影や遺書・ご家族の手記をパネルにした展示があり、多くの参列者



記念館内の展示物

が見入っていた。
山元会長は、長きにわたり私財を投じて真心を込めて慰霊顕彰を続けて来られた。嘗て戦友やご遺族、ゆかりの方々が慰霊碑を建て慰霊祭を行い、魂の安寧を祈り、「ご遺徳を伝えて来られたように・・・」純粋な英霊への想いと行動力に感銘を受けている。心からの敬意と感謝を捧げます。
※ 慰霊碑と記念館は、誰でも自由に参拝・見学できる。鹿児島空港から車で1分/パレルバレー(チエコ村)の敷地内にあります。0995-58-2535

長野縣護國神社特攻勇士之像慰霊祭

評議員 倉形 桃代

令和元年10月10日、当顕彰会の理事長代理として、長野縣護國神社(松本市美須々)の敷地内に建立された特攻勇士之像慰霊祭に参列した。ここ数年、自然災害が多い中、特攻勇士之像が祀られている神社の第二鳥居も昨年の台風21号による強風で倒壊、再建したばかりという



長野県特攻勇士之像

勇士之像は、入り口に近い場所に建っている。慰霊祭当日は快晴で心地よい風が吹いていた。慰霊祭の参列者は、奥谷一文宮司をはじめ地元の関係者十数名であつ

た。特攻勇士之像前に玉串を捧げ、少人数ながらも粛々と行われた。奥谷宮司が「特攻勇士之像に、時折若い人が花を供えて手を合わせている姿を見かけます。」と仰っていた。各護國神社に建立された勇士之像は、そのような心ある方々が、英霊への想いを深める一助となっていると感じた。



松本市招魂殿

慰霊祭の前、松本市内を散策した際に「四柱神社」の境内で、旧松本市出身の戦没者を祀った立派な「松本市招魂殿」を見つけた。凛々しく聳え立つ松本城の城下町、その面影や地域の歴史を感じる

機会も持つ事ができた。市内散策コースのガイドもあるので、時間に余裕があれば、特攻勇士之像に祀られた英霊が生まれ育った土地の風景や歴史に直に触れ、想いを馳せる時間を作る事も大切だと感じたひとときであった。

平成27年に16体目として建立された勇士之像をずっとお守り下さっている方々へ、心から感謝の気持ちを捧げます。

令和元年度明野忠魂塔慰霊祭

評議員 倉形 桃代

令和元年10月19日、陸上自衛隊航空学校が所在する明野駐屯地（三重県伊賀市）で行われた「令和元年度明野駐屯地追悼式」「第58回明野忠魂塔慰霊祭」に参列した。台風19号に伴う暴風雨の中ではあったが、式典当日の朝は風雨がおさまり、慰霊祭の前に行われたU・H-1の体験搭乗も飛行場周辺に限られたが行われ、幸い私も貴重な体験をさせて頂いた。英霊が飛んだ同じ空を飛ぶことができた事を光栄に思い、当時の若鷺達の心情を想いながらのフライトは無量であった。

約150名の参列者中、戦没者のご遺族は1家族、殉職者のご遺族は2家族であった。式典は開式の辞、国歌斉唱、拝礼、儀仗、服部正航空学校長・梶原久生顕彰会会長による追悼の辞、参列者全員による献花、追悼電報披露、儀仗、弔銃、拝礼、閉式の辞と、時折遠雷と屋根を叩く雨の音が聞こえる中、滞りなく終わつた。今回も、善家善四郎少尉（陸軍特別攻撃隊八紘第一隊／昭和19年11月27日・レイテ湾にて戦死）の妹さん・田辺さだ子さんが、ご子息ご夫婦に付き添われ参



体育館「明桜館」内に設けられた祭壇



小雨の中の「明野忠魂塔」

列された。生憎の雨天で長い道中が心配であったが、慰霊祭参列の為に体調を整えられ臨まれたお姿に、亡きお兄様への強い想いを感じた。

追悼式の後、まだ小雨が降る中、静かに佇む忠魂塔に参拝した。航空学校は、今も若鷺達が訓練に励む地となっている。手を合わせながら「後輩の方々が事故なく、任務に邁進できますように」と英霊のご加護を祈って駐屯地を後にした

第22回フィリピン特攻基地平和式典に
参列して

評議員 及川 昌彦

令和元年10月24日羽田国際空港で岡部俊哉理事と合流しANA便でマニラ空港に向かいました。到着後、在フィリピン日本国大使館防衛駐在官中野優1等空佐の出迎を受け現地案内人の竹内ひとみ様

とそのまま日本大使館に向かい山本恭司公使を表敬訪問しました。山本公使によるとフィリピンには様々な慰霊祭が開催されておりどの慰霊祭に大使館として関わるか慎重に判断しなければならぬとのことでした。

翌25日はマバラカット市による第22回平和式典参列のため朝7時前に会場入りしました。市長が到着せず40分遅れて市

神風特攻隊75年で慰霊

【マバラカット共同】太平洋戦争末期の1944年10月、日本軍の神風特別攻撃隊がマニラを出撃し、フィリピン・レイテ沖で米艦船に初めて突入してから75年となった25日、出撃拠点だった飛行場跡がある北部ルソン島マバラカットで戦没者の慰霊式典が開かれた。



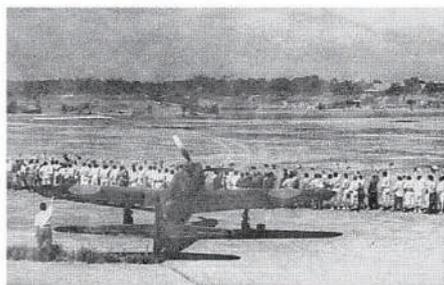
地元住民ら200人

護摩をたいて戦没者を追悼する参列者(左)ら25日、フィリピン・マバラカット

特攻隊は、連合国軍南西太平洋方面軍のマッカーサー司令官が中部レイテ島に上陸する前日の44年10月19日、大西滝治郎中将が編成を命じた。第1陣として敷島隊長関行男大尉(当時23)らが21日

25分とほぼ同時刻に始まり、日本から参加した最福寺(鹿児島市)の徒弟らが護摩をたいて戦没者を追悼した。

近隣の小学校の児童も参加し、マバラカットのジェラルド・アキノ副市長は「若い世代に平和への強い信念を持ってもらいたい」とあいさつした。



出撃する神風特別攻撃隊 1944年10月、フィリピンのマバラカット飛行場

に出撃したが米艦船を発見できず、25日にレイテ沖で初めて体当たり攻撃を行い、空母セント・ローを撃沈。他の空母も損傷した。

長不在のまま開式となりました。地元住民ら約200人が参列する中、フィリピン空軍音楽隊によるフィリピン国歌・君が代吹奏、海ゆかばを合唱し来賓が紹介されマバラカットのジェラルド・アキノ副市長の挨拶、岡部理事によるメッセージ、空軍牧師、イスラム教、カトリック教による祈りの言葉と続き、最後に薩摩修験道の護摩法要により式典は終了しました。閉会後は市庁舎別館でマバラカット市長と会食、その際、急に県知事に呼ばれたため止む終えず式典を欠席したとお詫びされていました。その後マバラカット東飛行場跡の特攻隊と西飛行場跡に日本から持参した日本酒を捧げました。現地在住の日本人や日本から参列した方々との昼食後にデイソン邸のカミカゼ博物館を見学しました。これで今回の予定を完了し26日に帰国の途に着きました。

(7) 第129号

神風特攻敷島隊五軍神・愛媛特攻戦没者
慰霊追悼式に参列して

評議員 宮本 雅史
編集長 金子 敬志

令和元年十月二十五日に催行された「神風特攻敷島隊五軍神・愛媛特攻戦没者 慰霊追悼式」に宮本評議員とともに参列させて頂いたので、慰霊祭の概要と所見を報告する。

一 慰霊祭の概要

慰霊祭は関行男中佐が散華された十月二十五日に因んで、毎年その日に催行されており、慰霊碑は愛媛県西条市大町にある榎本神社境内に建立されている。

当日は前日の雨も上がり、所々に青空が覗く天候となった。

慰霊追悼式に先立って今年から9時30分より自由参加による神式の慰霊祭が執り行われた。

これは 慰霊追悼式は、自治体首長、議員、自衛隊などの公的組織からな参列があるため無宗教の形式で実施されるが、一方、日本古来の神式での慰霊祭を行いたいと言う希望に応えたものと考える。

慰霊追悼式は10時30分から開始された。参列者のご遺族、戦友、来賓、一般参列者等約270名であった。

- 1 式次第は次のとおりである
- 2 開式の言葉
- 3 国旗・軍艦旗掲揚
- 4 国歌斉唱
- 5 鎮魂の礼（献茶） 追悼の言葉朗読
- 6 黙祷
- 7 儀仗の礼
- 8 献花・式辞
- 9 献花・追悼の言葉



- 10 追悼の歌
 - 11 帝国海軍儀仗
 - 12 追悼電報披露
 - 13 「海ゆかば」斉唱
 - 14 謝辞遺族代表
 - 15 国旗・軍艦旗降納
- 追悼式は12時10分頃に終了し、解散となった。

二 所見

令和元年十月二十五日、愛媛県西条市の榎本神社で行われた「神風特攻敷島隊五軍神・愛媛特攻戦没者慰霊追悼式」に五年ぶりに参列した。前回、関行男中佐の墓を案内してくれた「神風特攻敷島隊五軍神 愛媛県特攻戦没者奉賛会」の上野副会長にも再会、副会長は前回同様、「松山にも関中佐を知らない市民が多い。彼らの死の上には平和があることを、愛媛県民だけではなく全国民に分かってほしい」と真剣な眼差しで話した。

式典には、昭和二十年四月十一日、神雷部隊第五建武隊の隊員として出撃、喜界島南方海域で敵機動部隊に突入、散華した曾我部隆二飛曹（当時十九歳、戦死後中尉に）の弟、勲さん（九十歳） 〓 愛媛県西条市 〓 も参列、遺族代表としてこうあいさつした。「私は当時十五歳で、中学一年生だった。

先輩たちは日本の勝利を信じて飛び立っていった。兄も祖国の平和を念じ、家族の安全を思い出撃していった。でも、多くの御霊は靖国神社に本来に安らかに静まっているのでしょうか。皇室と総理は公式参拝できない。『国のため逝きたる御霊は安らげきか』と、この一言に尽きる

曾我部さんは五年前も遺族を代表してあいさつをしたが、この日のあいさつを聞いていて、五年前の言葉が重なった。

「血汐たぎる若者が祖国を守らんと志願し、靖国神社で会おうを合言葉に、陸、海軍合わせ240万人にもものぼる同胞が

国難に殉じましたが、その御霊は今、靖国神社で安らかに鎮まっているのでしょうか、それとも千の風になって舞っているのでしょうか。皇室をはじめ歴代総理大臣も公式参拝すらできないのです。これが世界有数の経済大国であり独立国日本の姿でしょうか。私は尋ねたい。それは『今にして聞きたいことは、国のため逝きたる御霊は安らげきかと』この一言に尽きると思います」

私の手元に一通の追悼賦がある。

「朝露よりもろく私達から消えてしまった。四階級特進という荣誉も、靖国

の母という誇りも、一切は敗戦によって遠い夢の彼方に置かれてしまった」

「あれから幾年月、人前では流せない涙で幾夜枕のぬれたことか。遺品を受け取れとの通知に、首を長くして待ちに待たが、とうとう遺品は何一つ帰って来なかった」

「同級だった方や、同じ年頃の青年を見るにつけ想い出しては涙ぐむ、偲んでは涙ぐむ母さん。せめて少し豊かな人生を味あわせてやりたかった。『幽明 境を異にして、呼べど、呼べど、声なき敏郎よ!』」

昭和二十年四月十四日、第四神風櫻花特別攻撃隊神雷部隊として出撃、徳之島東方海域で戦死した山崎敏郎二飛曹（没後海軍少尉）の母親の追悼賦だ。息子が戦死して七年后に書いたものだが、切々と心中を吐露している。

そして、母はこう綴っている。

「唯『お国の為は何の惜しげもなく若い命を捧げた』その事については、母は未練は言いません。終戦以来の混乱で尊いお前達の犠牲が世の中の人々から忘れられていても、新しい日本建設の陰には、尊い幾百万同胞の生命がかけられていた事を、国民の一人一人が泌々と思ひ起こ

し、その死を決して無にしないよう努力するのが残された私達のつとめであると申します」

曾我部さんは追悼賦から『お国の為に何の惜しげもなく若い命を捧げた』その事については、母は未練は言いません：「国民の一人一人が泌々と思ひ起こし、その死を決して無にしないよう努力するのが残された私達のつとめであると思ひます」と引用、「平和もろとも末永く語り続けて頂きたい」としめた。勲さんは以前、「戦争に負けると考え方が違ってくる。教育が違うから、考え方が根本的に違う人が体制を占めるんじゃないか。わしは、十二歳から十五、十六歳まで、世間の変化や親父の姿を見て生きてきたから、苦しい時があつて、苦しい思いをした人がいるんだと。そしてそういう人がいたから、今の日本があるんだと、伝えていきたい。それがわしの務めだ」と話していたが、聞くと、毎年遺族を代表してあいさつをしているという。別れ際、「もう九十歳。元気でいる間は毎年、挨拶をしたい」と語った。

以上



大阪護國神社特攻勇士慰霊祭参列報告
専務理事兼事務局長 石井光政

令和元年10月27日(日)に大阪護國神社で催行された「第11回特攻勇士慰霊祭」に参列したので報告する。

当日は朝11時より、大阪護國神社境内の拝殿右に立つ「特攻勇士之像」の前で、近畿偕行会顧問の中一皓様の開式の辞で始まり、国歌斉唱、黙とうに引き続き、

神事が執り行われた。祭文で特攻勇士顕彰会会長兼近畿偕行会会長の加賀本昭雄様が、全国護國神社に順次奉納されている「特攻勇士之像」は、ここ大阪にある大阪芸術大学の教員、学生が作った「日本人の心を伝える会」の趣旨を(公財)特攻隊慰霊顕彰会が受けて始めたのが始まりで、「一身を捧げられた特攻勇士の崇高な精神を、日本国民一人一人が永遠に肝に銘じて伝承し続けて行くこと」がその狙いであり、「今の我が国の平和と繁栄はその尊い死の上にあることに感謝し、永久に忘れてはならない」そのため慰霊祭であると述べられた。

式には大阪以外にも近郊の、京都府、兵庫県、奈良県からも関連団体や、議員、現役の自衛官等、約80名の方が参列され、神事終了後、陸上自衛隊信太山駐屯地の音楽隊が慰霊鎮魂の演奏を行い、13時30分に滞りなく終了した。その後、境内の儀式殿「高砂」に場所を移し、非常に和やかな雰囲気の中、直会が行われた。特攻勇士顕彰会の事務局長である熊谷勉様は、私が防大入校時の4年生で、当時も大いにお世話になったが、今回もすべてを取り仕切って円滑な運営をしていただき、今回も熊谷様には大変お世話になり

ました。特攻勇士顕彰会、近畿偕行会、大阪護國神社に感謝申し上げますとともに、ますますのご発展と、慰霊祭が継続実施されることを祈る次第です。



陸自音楽隊による慰霊鎮魂演奏

埼玉県「特攻勇士之像」慰霊祭に参列して

評議員 秋山 政隆

1 慰霊祭の概要

令和元年10月31日(木)、埼玉縣護国神社「特攻勇士之像」前にて催行されました埼玉県特攻慰霊祭についてご報告致します。

秋晴れの中、ご遺族、戦友を含め、二十二名が参列した。今年から式典全般に亘り、神職三名の方から構成される雅楽演奏が加わった。



特攻勇士之像前における式典



神職三名による雅楽演奏

慰霊祭は国歌斉唱に続き、埼玉県特攻戦没者に対して黙祷、埼玉県護国神社禰宜、山田信之氏による神事が執り行われ、会場が厳かな空気に包まれた。祝詞において一〇四柱の英霊、お一人お一人の名前が読み上げられた。

当頭彰会から、機関紙「特攻」編集長、金子敬志氏が追悼文を奏上した。神事は滞りなく催行され、終わりに埼玉県特攻勇士之像奉賛会、関根則之会長(海兵78期)の挨拶で式典が締めくくられた。会場を護国神社社務所2階へと移し、直会となった。関根会長による毎年恒例

となったご講話を頂いた。

冒頭関根会長は、それぞれ個別の事情があるなかで、決死の覚悟で行動をなさつて国に命を捧げられた英霊に対し改めて感謝と哀悼の言葉を述べられた。続いて、神職の山田信之禰宜に、本当に丁寧な祝詞をあげられ、一〇四柱の特攻の名前を一人一人、読み上げられたことに感謝の意を伝え本論に入った。

大西滝次郎中将は、自ら特攻作戦というものは外道であると仰った。では何故その外道をやらなければならなかったかについて中将の見解として二点挙げられた。①武人として命を国に捧げるといふ尊い決意、百年後千年後にこのような若い人たちが必死の場面で命を捨てたことは、日本の将来の復興を果たす原動力になるだろう。②このような行動をとればその実績が天皇陛下にまで聞こえて、陛下が戦をやめると仰るはずだ。実際、そのお言葉通り陛下はもう戦いはやめよう、日本民族が絶滅しては仕様がな、生き延びようということをやめて頂いた。

その精神、特攻というものは決して無駄になっていないと思っている。そのことよって我が国の戦後の繁栄、平和の意義が出来るのだと改めて身に染みて感じると述べられた。

また令和の時代が始まり、先ごろ宮中に於いては即位礼正伝の儀が盛大に執り行われた。一九一か国の元首級、皇室の方々が参会されたが、口を揃えるように日本の伝統文化、精神的な支えに感嘆の言葉を吐露された。新しい天皇陛下を頂いてこれからの新しい平和で豊かな日本を築いていただきたいと切望する。いつまでも諸外国から敬われるような素晴らしい日本を続けていただきたいという思いを致すところだ。戦後の苦難、災害を乗り越えてきたのが日本、その中心が天皇



直会において講話をされる関根会長

陛下であると考え。そして、国柄をしつかりと支える最高の姿というのが、お祀りさせて頂いている特攻勇士の方々なのだ。従って埼玉特攻勇士之像をいつまでもお守りをし、慰霊顕彰を行っていくことが日本の繁栄に繋がっていくだろうと述べられ、講話を締めくくられた。続いて金子編集長による献杯の発声で懇談となった

2 報告と所見

今年七回目となる埼玉県特攻勇士之像慰霊祭は、平成25年10月31日の除幕式以来、埼玉県護国神社様主催で、毎年恒例行事としてご遺族、戦友、特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員を中心にご参列頂き、執り行われております。

昨年、関根会長のご意向にて、埼玉県特攻勇士之像奉賛会が正式に発足致しました。関根会長以下、当顕彰会評議員で、元航空自衛隊、第一八代航空開発実験集団司令官岩成真一氏を理事長、同じく顕

終わりに、遺族代表の白田理事より来年は旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の建物復原整備工事が夏には完成予定なのでこの慰霊祭と合わせて熊谷基地司令、入間基地司令も来賓として招待して盛大に開催したいと締めくくられた。

この度の直会では、大変良き交流もなされました。甲飛から参列された小島啓三様と少飛会から参列された石田行男会長が隣席するという出来事がありました。また光景を目にすることが出来ました。また特幹の茂木昌三様とも久しぶりに再会出来て感激しましたとの及川評議員からの感想も頂きました。

お国のため、郷土のため尊い命を捧げられたご英霊に哀悼と感謝の気持ちを抱き、埼玉県護国神社様と共にできる限りの尽力をさせて頂きたく思いを新たにしております。

令和元年度 回天烈士並びに回天搭載
戦没潜水艦乗員追悼式

理事 鮎田 英一

令和元年十一月十日(日)、山口県周南市大津島回天記念館の回天碑前において、回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式が執り行われた。参加者はご遺族50名、回天の元搭乗員1名を含め、約350名であった。

大津島は、昭和19年11月8日「菊水隊」として初出撃をした特攻兵器・人間魚雷



回天記念館への道、左右に回天烈士109名の氏名を刻んだ石碑が並んでいる

「回天」の訓練基地が所在した島であり、回天記念館は、徳山湾を見降ろす旧練兵場跡に昭和37年に建設され、平成10年に現施設に改修されている。

穏やかな青空の下、追悼式は11時半、開式のことばとともに国歌斉唱、黙祷、原田茂・回天顕彰会会長による式辞から始まった。藤井律子・周南市長、廣瀬正忠・海上自衛隊呉潜水艦基地隊司令、村岡嗣政・山口県知事代理が追悼の言葉を述べられ、周南詩吟連盟・峯誠(ほうせい)吟詠会が、鳥巢健之助・元第六艦隊参謀の「回天搭乗員に捧ぐ詩」と水井淑夫(よしお)海軍大尉の遺詠を献吟された。

次いで参加者総員による献花へと移り、その間、海上自衛隊小月航空基地のT-5練習機3機と航空自衛隊防府北基地のT-7練習機による追悼飛行があり、追悼電文が奉読された。その後、11月8日の「平和の島スピーチコンテスト」中高生代表、新久保万央(しんくぼまお)さん(ザビエル高校3年生)によるスピーチ披露があり、大徳山太鼓「回天」保存会による太鼓演奏が奉納された。本追悼式で特筆すべきは、平成26年、米国で出版された「KAITEN」の共



マイケル・メア夫妻

著者であるマイケル・メア夫妻が米国から参列し、ご挨拶をされたことであった。メア氏(65歳)の父ジョン・メア氏は、回天が初出撃をした「菊水隊」の攻撃により、昭和19年11月20日、西太平洋ウルシー環礁において沈没した米海軍給油艦ミシシネワの生存乗員であった。

メア氏によれば、平成17年、死の床にあった父君は、それまで家族にほとんど語る事がなかった米艦ミシシネワと回天の戦いに触れ、私たちは祖国のために戦った、同様に回天搭乗員も国のために戦い責務を果たしたのであって、そのことは決して忘れ去られてはならないと語り、日米の若者が祖国のため死力を尽くした真実を本に著し、将来を担う若い世代に伝えていくようメア氏に約束させたという。以後、ジャーナリストのジョイ・

ウオルドロン氏の協力を得て、米海軍の記録を調査し、300人以上の米国生存者・関係者にインタビューをするなど10年の歳月を重ね、日米双方の動きをまとめて「K A I T E N」は出版に至った。平成29年には、回天顕彰会により日本語翻訳版が自費出版されている。

この後、原田・回天顕彰会会長が安倍晋三・内閣総理大臣からも弔電が届いたことなどを紹介され、最後に遺族代表として金剛隊・塚本太郎少尉の弟・塚本悠作氏が、ご挨拶をされた。

塚本氏は、大津島での追悼式に、回天が沈めた米軍関係者が参列される日が来ることなど、当時の回天搭乗員には想像すらできなかったであろうと、戦後の国際関係の移ろいに言及され、天皇陛下御即位の祝賀御列の儀が行われ、日本国民の心が一つとなる佳き日に追悼式が執り行われたことは感無量であると結ばれていた。

13時過ぎ、追悼式は終了したが、回天碑前において原田会長、メア夫妻、塚本氏は、地元放送局・新聞社の取材陣に囲まれ、長い取材を受けておられた。追悼式は、かつて敵国同士であった日米両国の恩讐を越えた友愛と絆が感じられる

式典となり、若い世代からも多数の参加者が見られた。

本追悼式の準備運営に当たっては、地元の桜ヶ丘高校書道部の先生、生徒、OB約30名が回天烈士の墓碑名の墨入れをされ、立正佼成会会員約50名が来島し、草刈や庭木の手入れ等をされた。当日は、早朝から大津島・馬島連合自治会、周南市大津島支所、回天記念館等約30名の有志が式典の準備や、ささげ飯の無料提供等の支援に当たられていた。

大津島での慰霊顕彰の営みは、今後とも地域有志・関係者の方々の緊密な連携とご努力により連綿と受け継がれていくことであろう。

(追記) 令和元年11月3日、大津島馬島港近傍に回天烈士の御霊を祀る大津島回天神社の竣工式があった。昭和19年9月、大津島基地開設時に、回天神社と名付けられた湊川神社の楠公を祭神とする祠が回天搭乗員兵舎に安置され、回天搭乗員は神社に必中祈願をして出撃をした。昭和21年以降、祠と御霊壘は本土側の山崎八幡宮に預けられていたが、回天出撃75年目となる本年を期して、回天烈士の御霊をお祭りする徳山御影石づくりの社が、

関係者の皆様のご努力ご厚意により、回天の聖地である大津島に完成した。



竣工なった大津島回天神社

若潮慰霊祭に参列して

編集長 金子 敬志

令和元年11月23日(土)香川県小豆郡土庄町の富岡八幡神社で営まれた「若潮慰霊祭」に特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して参列させて頂いたので、概要と所見を述べる。

一 概要

昨年に続き慰霊祭に参列させて頂いた。昨年は5年毎に行われる大祭であったが今年規模を小さくした例祭として行われた。

「若潮の塔」は昭和48年11月23日に建立されたもので、陸軍船舶特別幹部候補生以下戦歿英霊千四百七柱祭られている。慰霊祭は建立日に当たる11月23日に毎年



祭壇が設けられた「若潮の塔」

慰霊祭が執り行われ、5年毎に大祭が執り行われ、大祭の間は例祭が開催される。今回の場所は、大祭が執り行われる淵

崎護国神社とは違って、そこから少し下がった「若潮の塔」前で執り行われた。

慰霊祭は定刻の11時に開始された。

主催は小豆島町湊崎地区の自治会や有志らで構成される「若潮の塔奉賛会」である。

参列者は、奉賛会会員、ご遺族、元隊員等約30名であった。

富岡八幡神社三木宮司により祭事が執

行された



祭事を執行された富岡八幡神社三木宮司

慰霊祭の式次第は次の通りである。

- 一 開式の辞
- 二 君が代斉唱
- 三 黙祷
- 四 修祓の儀
- 五 祭主一拝
- 六 献饞の儀
- 七 祝詞奏上
- 八 玉串奉奠
- 九 撒饌の儀
- 十 祭主一拝
- 十一 閉式の辞
- 記念写真撮影

玉串奉奠では私が顕彰会代表として奉奠させて頂いた。

慰霊祭は式次第に則り、約30分で滞りなく終了、その後、場所を神社社務所に移して直会が行なわれ、参加者は和気あいあいの中、交流を深めていた。

二 所見

昨年も参列させて頂いたが、今回も感じたのは地元の方々のご尽力の深さである。各地の慰霊祭が元隊員の高齢化に伴い継続するのが困難になりつつある中、地元の方々による「若潮の塔奉賛会」が主催して執り行われる本慰霊祭は今後も継続されるものと強く感じた。

第八戦隊及び基地第八大隊戦闘経過

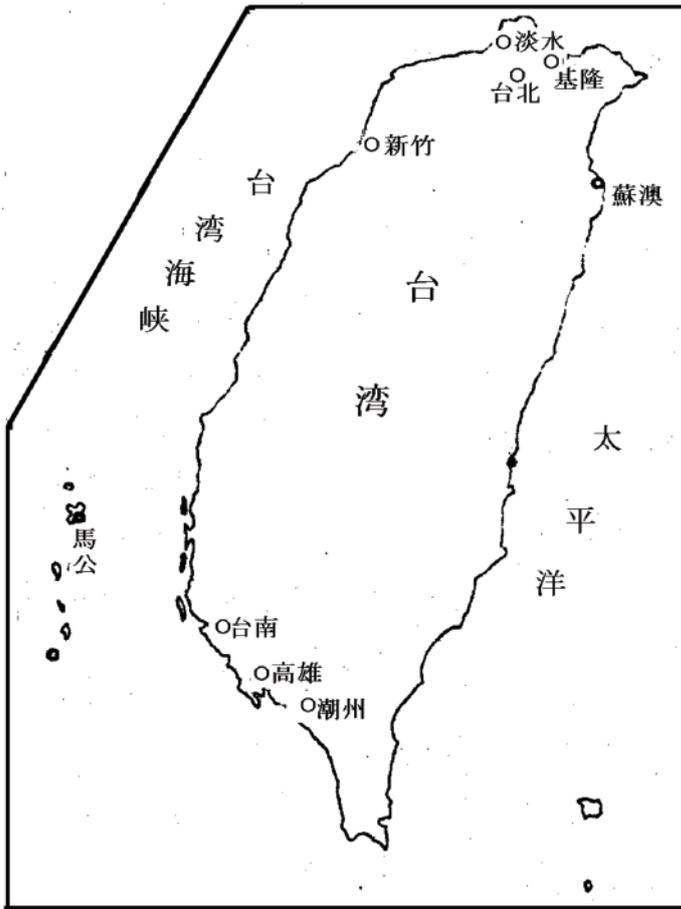
元隊員 中溝 二郎

海上挺進第八戦隊は、暁第一六七八四部隊と称し、十九年八月下旬から豊島基地で訓練に入っていたが、九月十八日付で宇品で正式に編成された。

戦隊長は陸士五四期の秋山軍士大尉で、第一中隊長は金山光利中尉、第二中隊長山田幹夫中尉（何れも陸士五六期）、第三中隊長は中尾秀義少尉（陸士五七期）、本部付として石月忠夫少尉（幹候八期）、群長は久留米第一予備士官学校出身幹候一〇期の見習士官（二十年一月少尉）、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

九月二十二日宇品港を出航し、門司で舟艇を受領の後、部隊本部と第一、第三中隊の主力は山萩丸に、第二中隊は神悦丸に乗船した。船団は何れも十月初旬に台湾高雄港に着き、戦隊員が高雄に上陸中、台湾沖航空戦となり山萩丸は高雄港内で米軍機の空襲を受けて撃沈され、積載中の舟艇全部を失った。

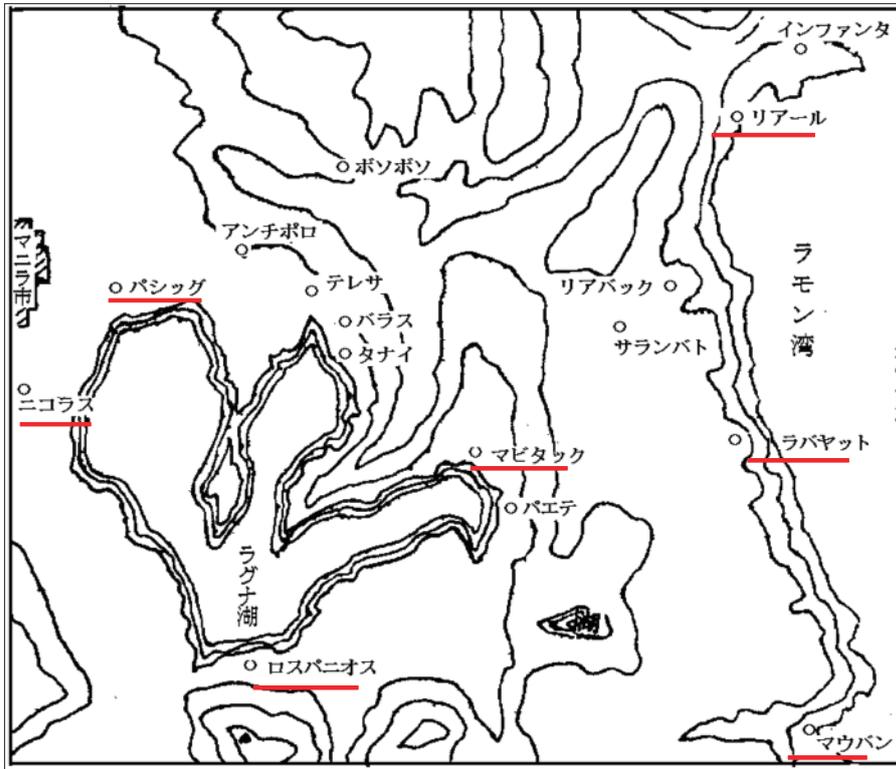
このため本隊は、高雄市内の旭国民学校に駐屯し、ここで内地からの舟艇補給を待っていたが、状況は逐次悪化し、遂に比島向けの出航は不能となり、第五戦隊、第二〇戦隊と同様に台湾軍に編入替



えされることとなり、昭和二十年になって台湾派遣軍下の第二三戦隊に石月少尉他一〇名が転属し、又、二三戦隊から舟艇の補給を受けて、高雄川上流の凹子底（おうしてい）に駐屯することとなり、終戦時までここで訓練を実施していた。

一方、第二中隊の山田中尉他三〇名が乗船していた神悦丸は、本隊の輸送船が高雄港で空襲を受けた際は、馬公港に退避しており、ここも空襲を受けたが同船は沈没を免れたため、先発として十一月二日高雄を出航し七日にマニラに着き、十二月の二日に任務地である東部タヤバス州マウバン地区に展開し、（なお当初の南方総軍の配置計画では、この戦隊を北部ボルネオに予定していた）本隊の到着を待っていたが、十二月中旬には本隊の比島到着は極めて困難視されるように七戦隊（戦隊長内田大尉）に編入されることとなり、その第四中隊と呼ばれた。以来第七戦隊と行動を同じくしていた

が、二十年一月二十八日海上訓練中突如飛来した米軍機の機銃掃射により、近藤少尉（幹候一期）、末本伍長（特幹）の二名が戦死し、他に一名が負傷した。この中隊も木暮支隊長（第一挺進基地隊長木暮中佐）の命令に基づき一月三十一日、七戦



隊と共にマウバンから第一〇戦隊の配備地域となつているインファンタ地区のトングヒンに海上転進を行なつたが、途中山田中隊長以下七名の分乗した舟艇が相次いで故障し、やむなく最寄りの陸地(ラバヤット付近)に上陸したが、優勢

なゲリラ部隊の攻撃を受けて、岡村少尉(幹候一〇期)、岡本・河島・塘地・山本各伍長(いずれも特幹)の五名が戦死し、山田中隊長、伊集院伍長、の二名が辛うじてリアル基地に辿り着いた。三月下旬、第七戦隊主力及び、第一〇戦隊の一〇中隊とともにラグナ湖を舟艇で横断し、ニコラスフィールドに斬込みを執行するため、マビタックまで移動した。

四月三日マビタックから発進し、翌日パシッグ付近に上陸しようとしたが、陸岸にいたゲリラ隊との戦闘で、八名の戦死者を出した。なお第七戦隊後呂武少尉(幹候一〇期)以下数名と第八戦隊小島正実少尉(幹候一〇期)以下九名の分乗した舟艇は翌日未明、ラグナ湖南岸ロスバニオス附近に漂着した。やむなく舟艇を沈めて上陸したが、この地域一帯は既に米軍の占領下になつていて、そのためマニラ斬込みを断念リアル基地の挺進基地に帰還すること

にした。

然し、しばしば米軍・ゲリラ隊と遭遇し、これらと交戦を続けながら敵占領地を突破しなければならぬため、七戦隊の後呂少尉以下死傷者が続出し、八戦隊では財間・菅原・棟方・山形・武内の各伍長(いずれも特幹)五名が戦死し、小島少尉以下四名(伊集院・松崎・服部)が一ヶ月以上経過後の五月下旬漸くリアル基地に辿り着いた。

他に、東部に残留していた者も五月以降、第九・第一〇等他の戦隊員と共にリアル基地に斬込みを行なう等、来襲してきた米軍としばしば戦闘を行なつてきた。

二十年八月八日、第九戦隊主力及び第一〇戦隊の一部が木暮支隊直轄の隊として、パエテ東方山地に南下して行った際、これと同行した者は一名(小島少尉)だけで、残余の隊員は第七戦隊斎藤大尉の指揮下にあつてリアル附近でゲリラ部隊との戦闘を続けていたが、大半は戦死したものと思われる。(ここからの生還者がいないため詳細は不明である。昭和二十年九月十二日タヤバス州インファンタ戦死となつている)

このため比島に渡った隊員で生還者は小島正実少尉(幹候一〇期)一人のみに過ぎなかった。従つて戦隊の被害が、将校三名、隊員

二十七名の合計三〇名の戦死に止まったのは、前記のような事情のためで、第五戦隊に次いで比較的幸運に恵まれた隊であったということが出来る。

海上挺進基地第八大隊は、暁第一六七九五部隊と称し、十九年八月三十一日宇品において、長一二三少佐（特別現役志願七期）を大隊長とし、中隊長に内野博中尉、柏原徹巖中尉等で編成された。

九月二日に主力である大隊本部、第一、第二、第三中隊は、宇品を出航したが、整備中隊の主力だけは戦隊の本部等の主力と行動をとることにしたため、後発船団の乗組となった。

本隊の乗船した船団は、門司出港の後、九月十二日に済州島沖で米軍の潜水艦による魚雷攻撃を受けたが、幸いに大隊員の乗船した輸送船には被害がなく、十月五日にはマニラに上陸できた。

この大隊は、南方総軍の配置計画では、当初は北部ボルネオに派遣される予定とされていたため、大隊長は単身でボルネオに先行し、ヌヌカンで現地人約三千人を用いて基地設定中であつたが、一四方面軍司令部ではルソンに兵力を集中する方針をとつたので、基地を変更し、マウバンと決定した。このため大隊長は十月二十三日アピを經由してマニラに復帰した。

以後二十九日までマニラに在つて隊の

整備を行なつていたが、十月三十日に任務地と指定された東部ラモン湾沿岸のマウバン近辺に基地設定のため移動を開始し、以後十二月二十三日まで同地で舟艇及び宿営基地の設定作業に当たつていた。

その後比島への米軍の上陸の予想が深まるに伴い、各基地大隊は何れも防備兵力として活用されることとなり、大隊も整備中隊の一部分を残して十二月二十四日から三十一日にかけて、マウバンを撤退してパグサンハンに移転して振武集団

長横山中将の指揮下に入り、基地第七大隊とともに、沖田支隊の一部となつて、更にラグナ湖北方のマビタックに転進した。

その後更に沖田支隊もマニラ東方山岳地帯に転ずることとなつたので、これとともに北上し、二十年一月一日から十八日までの間、テレサ、パラス付近でゲリラ隊の討伐警備に当たり、一月十九日から二月末まで、ボソボソ付近のゲリラ部隊の討伐及び同地区で対米軍戦闘のため

の陣地構築を行なつていた。更に三月一日から五月二十日までの間、マニラ市東方の拠点であるアンチポロ、テレサ、ボソボソ付近に進出の命令を受け、ここで米軍との戦闘に入り、この間逐次多くの戦死者を出した。五月二十日に行なわれたタナイ付近での米軍との戦闘は激しかったため、更に

戦死者が出たが、他方食糧の欠乏の深刻化に苦しみながら、八月二十日になつて敗戦を知つた。

一方戦隊主力とともに後発船団乗組となつた整備中隊の一部は、台湾で比島向け出航待機していたが、戦隊の主力と同様に渡航不能となつたため、台湾軍に入となり、基地設定に当たつていて敗戦を迎えた。

こうした転戦の結果、同大隊の戦死者は、総数八九一名中比島に渡つて生還した者は、僅かに十三名（ただしこの数は必ずしも正確ではない）に過ぎないといわれている。

海上挺進第八戦隊第二中隊比島戦記録

小島少尉

門司港出港、比島向け壮途に就く

小豆島・豊島で、海上挺進特攻訓練を終えた、第八戦隊、戦隊長秋山大尉以下一〇七名は、門司港で輸送船、山萩丸、神悦丸に乗船、㊦舟艇一〇〇隻を積載して、勇躍比島向け壮途に就いた。山萩丸には、秋山戦隊長以下、本部、第一、三中隊の七六名、神悦丸には第二中隊長山田中尉以下三名が、夫々分かれて乗船した。小豆島より共に行動して来た第二中隊が、乗船を異にしただけで、後日の武運を左右することにならうとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

門司港を出港して、九月二十八日、三池港沖に碇泊。一〇数隻の輸送船団を組んで、一路目的地に向かった。

高雄港上陸、米機動部隊高雄大空襲

有力な米軍機動部隊が台湾沖へ接近中の情報により、船団は一時、台湾高雄港に退避寄港することになった。

一〇月五日、高雄港に入港して兵員を揚陸、秋山戦隊長以下七六名は、高雄市内旭国民学校に、第二中隊山田中隊長以下三名は、湊国民学校に仮舎営することになった。

一〇月一日、米軍五八機動部隊空母より発進した艦載機、数百機による大空爆を受けて、高雄港に碇泊中の輸送船の大半が撃沈された。山萩丸も舟艇、爆雷と共に沈没したが、神悦丸は、澎湖島馬公港に待避していたので、幸運にも空爆を免れることが出来た。

高雄港出港・比島に向う

一月二日、第二中隊三名は、八戦隊の先遣隊として再び神悦丸に乗船、船団を整えて比島マニラに向け、高雄港を出港した。魔のバシー海峡を突破して、一月上旬バターン半島南岸マリベレス軍港に入港した。

輸送船団、米空軍の大空爆を受ける

入港早々米空軍の空爆の洗礼を受けることになった。マニラ空襲に群がっていた米空軍機の大編隊が、見る見るうちに

我々輸送船団に襲いかかって来た。すぎましい銃爆撃を浴びて、僚船の大半が撃沈され、多くの兵員が海上に投げ出されて救助を求め、二中隊乗船の神悦丸は幸運にも被爆を免れた。

群がる敵機の機銃掃射の中で、我が二中隊員達は実に沈着冷静に対応、甲板にいた者は、マストを楯がわりにして、真赤に焼けた機関砲弾をかわす等、鬼神の如き応戦振りであった。この光景は、今もなお私の脳裏に焼きついている。

夕方になり敵機も去っていった。他部隊の兵員達は、恐怖感で先を争って下船したが、二中隊員達は整然と列を正して、神悦丸から下船していった。

矢次伍長マニラ仮泊所で戦病死

風土病マラリヤに罹り、医療も十分に行き届かず、一月一六日病死していった。まことに、あどけない死に顔だった。屍衛兵護衛の中で茶毘に附した。戦隊編成以来最初の犠牲者だった。

マウバンに展開・布陣

一月下旬、東海岸ラモン湾に面する、マウバンに展開布陣する為、マニラで舟艇をトラツクに積載して輸送することになった。

ラグナ湖南岸（現在の一号線）の椰子並木街道を東へ、タヤバス、ルクバンを経由してマウバンに到着。一月二日、マウバン南方を流れるバライバライ川下

流々域に展開、椰子林の中に陣地を構築して、舟艇を格納した。

・第八戦隊本隊の比島到着が不可能となったので、同地域に布陣している、第七戦隊長の指揮下に入った。

出撃に備えて、連日舟艇の整備、爆雷を両舷に装着しての爆雷投下の訓練を続けた。

二〇年一月元旦、バライバライ川椰子林の陣地の中で、はじめての新年を迎えた。特幹隊員達の胸中は何ばかりだったろうか。

一月二八日、近藤少尉、未本伍長戦死。マウバン沖で、船艇による海上訓練を実施中、実如飛来したロッキード二機の機銃掃射を浴びて、兩名非運の戦死、岡本伍長が重傷を負った。

特幹隊の隊員達は、戦場ではじめて遭遇する悲惨さ、冷酷さに強い衝撃を受けたが、撃ちてしまふの闘志をいよいよ固めたのだった。

第七・八戦隊、インファンタに転進

一月三〇日、海上挺進基地本部長・暮中佐より、バライバライ川陣地を撤収して、インファンタ地区リアルへ舟艇機動による転進を命じられた。

「マウバン方面には、米軍の上陸可能性は極めて薄い」との状況判断により、インファンタ地区に既に展開している、第九、一〇戦隊と合流して、戦力を結集

することになった。

第七戦隊九五名、第八戦隊山田中隊長以下二八名は、一月三〇日夜半、舟艇をつらねて、ラモン湾太平洋上をインフアンタに向けて北上していった。

航行途中、山田中隊長以下七名の分乗した舟艇が相次いで故障。やむなく最寄りの陸地（ラバヤット附近）に上陸したが、優勢なゲリラ部隊の攻撃を受けて、岡村少尉、岡本、河島、塘地、山本伍長達五名が、応戦も空しく無念の戦死を遂げた。

小島少尉以下二一名は、一月三一日未明、リアル川河口に無事到着した。
・ラバヤットの交戦で死地を脱出した、山田中隊長、伊集院伍長が、二月二日全身に傷を負いながらも、辛うじてリアル陣地に辿り着いた。

二人の生還を喜びあうとともに、無念の戦死を遂げた岡村少尉以下五名の霊を追悼して、任務の貫徹を誓い合った。

海上挺進集隊編成される

二月上旬、第七、八、九、一〇戦隊による海上挺進集隊が編成され、第一〇戦隊長菅原少佐が集隊長になった。

これより三月上旬に至る間、リアル川流域に舟艇を秘匿し整備作業を進めながら、出撃可能な態勢を整えた。この地域は雨が多く湿度が高いせいもあって、舟艇底部の合板が剥離、使用不能になる

ものが多発して、戦力が低下していった。舟艇によるラグナ湖横断

マニラ斬込み作戦開始

三月下旬、菅原少佐立案のマニラ斬込み作戦の実行が、振武集団司令部より下命され、菅原少佐はこの作戦の実行を、内田第七戦隊長に下命した。

リアル川トンゴヒンより、三〇隻の舟艇に分乗した第七、八、一〇戦隊員一二〇名は、夜間の海上をテグノアンに向けて南下し、ここで舟艇を揚陸して、トラックに積載。深夜の（現在の三二三、二一号线）を走って、ラグナ湖北岸のマビタックに輸送した。マビタック川下流の両岸に、舟艇を秘匿して出撃の機会を待った。

マニラ斬込みに出撃

四月三日、マニラ斬込みの出撃が下命された。恩賜の煙草の紫煙が漂う中を、第七戦隊七〇名、第八戦隊第二中隊一七名（残留者六名）、第一〇戦隊二八名、総員一一〇余名は、舟艇に夫々四〜五名分乗して、深夜のラグナ湖をマニラに向けて出撃していった。

第八戦隊山田中隊長、池田、高見、寺尾・奈良、中井（一民）、中井（政弘）、浜田伍長の八名が分乗した舟は、マニラ南方パシック附近の湖岸にたどり着いたが、米軍の迎撃に遭い全員壮烈な戦死を遂げたものと思われる。

第七、一〇戦隊員も、パシック附近の湖岸にて戦死を遂げたものと思われる。

小島少尉、伊集院、松崎、服部、財間、菅原、棟方、山形、武内伍長の九名と、第七戦隊後呂少尉他数名の分乗した舟艇は、翌日未明、ラグナ湖南岸ロスバニオス附近に漂着した。己むなく舟艇を沈めて上陸することになった。敵状偵察の為、一行は南岸を通る幹線道路を横断して、近くのマキリン山の麓に潜入して夜明けを待つことにした。

明け方になり、湖岸一帯を見渡したところ、既に米軍の占領下になっており、一面に米軍兵站の幕舎が見受けられた。又、一行が横断して来た幹線道路を走る米軍車輛の響きが聞こえて来た。炎天下、草叢に息を殺して潜む我々一行の前を、米軍パトロール隊の往来が終日続いた。

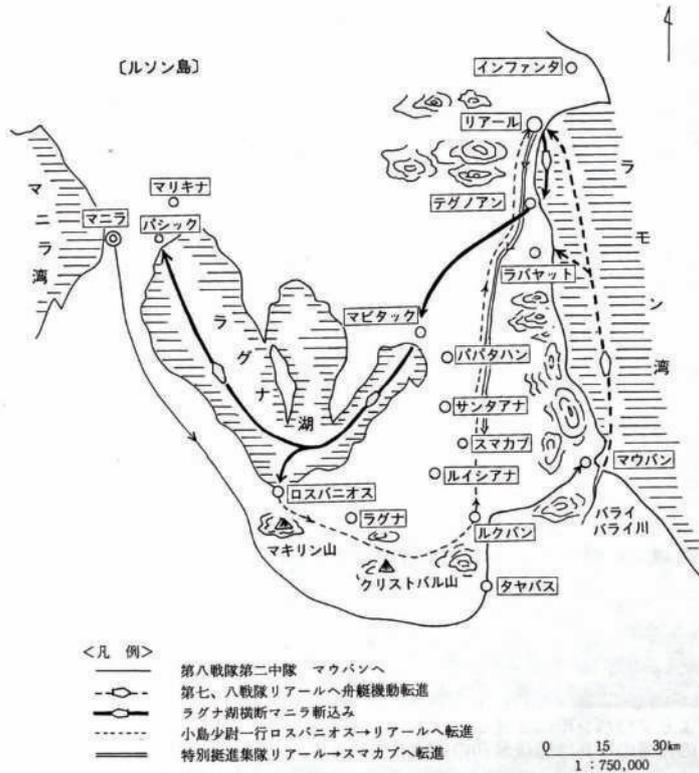
この時の一行の装備
小銃数名に一挺・拳銃各自一・弾丸若干
手製の爆薬二個

直径約一五糎の猛宗竹を三〇糎に切った筒に黄色火薬を詰め信管を装着したもの。振り分け荷物スタイルで持ち歩いた。

小島少尉一行マニラ斬込みを断念 挺進集隊基地へ帰還

小島少尉一行は、日暮れを待って米軍占領地を脱出。マニラ斬込みを断念、リアル挺進集隊基地に帰還することにした。先ずマキリン山を越えてラグナ湖南

第八戦隊第二中隊比島転戦略図



方の山林を通り、ルクバンを目標に転進することにした。
マキリン山溪谷の湧き水に顔を浸して飢渴を癒し、生気を取り戻した一行は途中、マキリン山を占拠していた基地一六大隊の分哨を通り、同基地隊員の一部が同行、古びた磁石を頼りに東進していった。
ラグナ湖南方のラグナ、クリストバルの山を越え、ラグナ湖東方のルクバン、

ルイシニア、パパタハンの山中密林を夜行軍、食糧の調達、ゲリラ隊との交戦を続けながら、五月下旬漸く、リアル山の山林陣地にいた挺進集隊の基地に辿りついた。
この間、五月はじめ、ルイシニア東方山林の中での、ゲリラ隊・米軍との交戦は最も苛酷だった。優勢な自動火器を持ったゲリラ隊の攻撃が早朝より始まり、続いて米軍飛行機観測による、迫撃砲の集中砲撃が終日執拗に続いた。我

間、菅原、棟方、山形、武内伍長、基地隊員達が無念の戦死を遂げた。
戦いすんで日が暮れたが、“おっ母さくん”と叫びながら、歩けない重傷者達は自決していった。
あの悲痛な叫び声は、今だに耳奥に残っている。
小島少尉も、迫撃砲弾の破片で左腕を負傷したが、腕を吊るして、生き残った伊集院、松崎、服部伍長達と戦場を脱出、暗夜の山林を北進していった。
又、食糧の調達は極めて困難だった。人里に下りてタピオカ(芋)等を採用したため、ゲリラ隊との交戦になることもたびたびだった。以後は、ゲリラ隊との交戦を避ける為人里を敬遠、現地住民が山腹に開懇した畠を狙った。残されたトウモロコシや芋の葉蔓等採取し、鉄帽で煮たものを分け合って飢を凌いだ。塩欠乏で両膝が重たく、水のような汗が出た。

中砲撃が終日執拗に続いた。我々が方も、基地隊員携行の軽機関銃を小島少尉が射手になって応戦したが、貧弱な装備では如何ともし難く、完膚なきまで叩きのめされた。
(迫撃砲の弾丸は垂直に落下するので、山林攻撃用に最も有効な兵器として多用される)
この戦いで、第七戦隊後呂少尉他、第八戦隊財

雨に濡れた草木の褥に身を横たえながら、遙かなる祖国に思いを馳せて、仮寝する夜が続いた。雨に打たれて左腕の傷に蛆が湧いた。
小島少尉一行、挺進集隊基地に帰還
残留部隊に合流
リアル山の挺進集隊基地に辿りついた小島少尉達は、菅原少佐より労はれ、残留部隊(第九戦隊主力)に合流を命じら

れて、陣地警備の任務に就いた。
相星、荒川、滝本、於保、伊津野各少尉
岡野伍長他この間、病気でリアルに残
留していた柴田伍長が、ゲリラとの戦斗
で五月一二日、戦死していたことを知っ
た。

第七戦隊斉藤大尉と再会。(マニラ斬
込みに出撃したが、舟艇故障の為ラグナ
湖中央部北岸に上陸、リアルに帰還し
た)

挺進集隊第九戦隊主力は、リアル南
方山中の陣地を拠点として、食糧の調達
ゲリラ隊との交戦を続けた。

この間、六月二八日、服部伍長がゲリ
ラ隊との交戦で無念の戦死を遂げた。マ
ニラ斬込み出撃より帰還まで、辛苦を共
にしてきただけに痛ましかった。

特別挺進集隊の編成

八月上旬、木暮支隊長の命令により、
特別挺進隊を編成して、ラグナ湖東方パ
タハン山地にいる小暮支隊本部に向か
うことになった。

当時、テグノアンの陣地にいた第九戦
隊長市原大尉を特別挺進集隊長として、
以下

第九戦隊 三〇名

林中尉、相星、荒川、滝本、於保、
伊津野各少尉、岡野軍曹他

第一〇戦隊 七名

小島少尉(八戦隊より転属) 菅原軍

曹、吉見軍医、他

第七戦隊基地隊 一名

島中尉

一行四〇名の編成であった。

一方、挺進集隊の負傷者、病気の者は、
第七戦隊斉藤大尉を長として、リアル
北方ジャングル内の陣地に残留すること
になった。

第八戦隊第二中隊の残留者は、伊集院、
松崎、岡村、下田、港、米村、森田伍長
でマリア、 Deng 熱の病氣負傷をして
いた。

門司港出港以来、生死を誓い合った戦
友達であり、又、伊集院、松崎伍長はマ
ニラ斬込み出撃より、リアル帰還まで
辛苦を重ねて来た仲だけに別れは不憫で
ならなかった。

テグノアンで、特別挺進集隊の編成を
終えた一行は、八月八日ラグナ湖東方パ
タハンに向けて出撃した。

八月下旬、(現在の三二三号線) 沿い
の山道を通って木暮支隊本部に到着、木
暮中佐の指揮下に入った。

これより小暮支隊一行は、パタハン
を南下、食糧の調達、ゲリラ隊との交戦
を続けながら、サンタアナ東方の山道を
踏破してスマカブの山地に到着。同地に
駐屯していた河田隊と合流した。

終戦を知り米軍に降伏

・九月一三日、終戦を知り全員山を降り

て米軍に投降、武装を解除された。

翌日、トラック輸送にてマリキナ捕虜
収容所に収容された。この時、木暮中佐
以下五〇余名で、何れも眼光だけが鋭く、
身体は骨皮だけのむなしい容姿だった。

・又、リアル陣地にいる斉藤大尉の指
揮下に入った残留隊に、終戦を伝えるた
め関係者が出かけて呼びかけをしたが、
この地域からは一人も出てこなかったと
言うことである。

不自由な身体で飢えと戦い、ゲリラ隊
と交戦しながら、友軍との連絡も途絶え
てしまった密林の中で、全員無念の戦死
をしていったものと思われる。誠に痛恨
の極みである。

第八戦隊第二中隊々員三一名中、三〇
名が戦死した。

一言の不満も云わず、従容として死地
に突進していった、海上挺進隊特攻隊員
達の死を永久に忘れてはならない。

私は四ヶ月間の捕虜生活を終えて、昭
和二一年一月三十一日、マニラより広島県
大竹港に生還した。

四年振りに、故郷宮崎県延岡の土を踏
んだが、駅から見渡す街は一面の焼野ヶ
原に変わっていた。

後記

この記録は、第八戦隊第二中隊の動向
を主にしてまとめましたので、高承下さ

い。
又、記憶違い等不備の点があるものと思いますが、どうぞご容赦下さい。

比島戦斗の一年間、幾たびか生死の間を彷徨した体験は、七二才の私の人生の中では、最も強烈で又、貴重なものでした。

この思い出は、比島の山野に青春を散華させていった、三〇名の初々しい英姿の面影と共に、これからも生き続けていくことでしよう。

一部に、ルソンの碑、ああ海上挺進特別攻撃戦隊等を参考にさせて頂きました。お礼申し上げます。

海上挺進第九戦隊及び基地第九大隊

元隊員 中溝 二郎

海上挺進第九戦隊は、通称号は暁（比島では威）第一六七八五部隊と称し、陸士五四期の上法真男大尉を戦隊長とし、第一中隊長市原秀男中尉（陸士五五期で、十二月に大尉となった）、第二中隊長林毅少尉、第三中隊長加藤達少尉（いずれも陸士五七期）、本部付将校として多々良孝宜少尉（幹候九期）がおり、群長は熊本予備士官学校出身幹候一〇期の見習士官（二十年一月少尉）、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

昭和十九年八月末から豊島基地で訓練

を行なっていたが、九月十八日付で宇品で戦隊の正式編成を終り、九月末主力（戦隊本部・第二・第三中隊）は永和丸

に第一中隊はハンブルグ丸に乗船、門司を出航し、十月上旬中に台湾の高雄港に着いたが、偶々ここで台湾沖航空戦に遭遇したため、主力は高雄にて下船、第一中隊は輸送船ハンブルグ丸に乗船したまま香港に退避し、下旬に再び高雄港に帰港し、十一月一日に船団を再編、ルソン島に向け出航した。

十一月二日夜、第一中隊の乗船した輸送船ハンブルグ丸（第六戦隊と同乗）が、ルソン島の北端に近いサブタン島西方海面で、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、その二発が命中した。乗員は海中に退避し翌日海防艦に救助された。船は沈没しなかつたが航行不能に陥ったため、翌日味方の海防艦の砲撃でこれを沈めた。この沈没により積載してあった舟艇三十数隻を失い、又、特幹一名が海没戦死した。

十一月七日にマニラに上陸し、十五日頃パシッグ川を遡行し、パシッグ附近にて第一〇戦隊とともに第一四方面軍司令官山下大将及び参謀長らの閲兵を受け、任務達成を激励された。

次いでここからリアル迄陸送、リアルから機帆船曳航にて海上輸送、任務地である東部ラモン湾地区タヤバス州イン

フンタ地区ミスワ（本部、第二、第三中隊）及びアンチキン（第一中隊）に展開した。

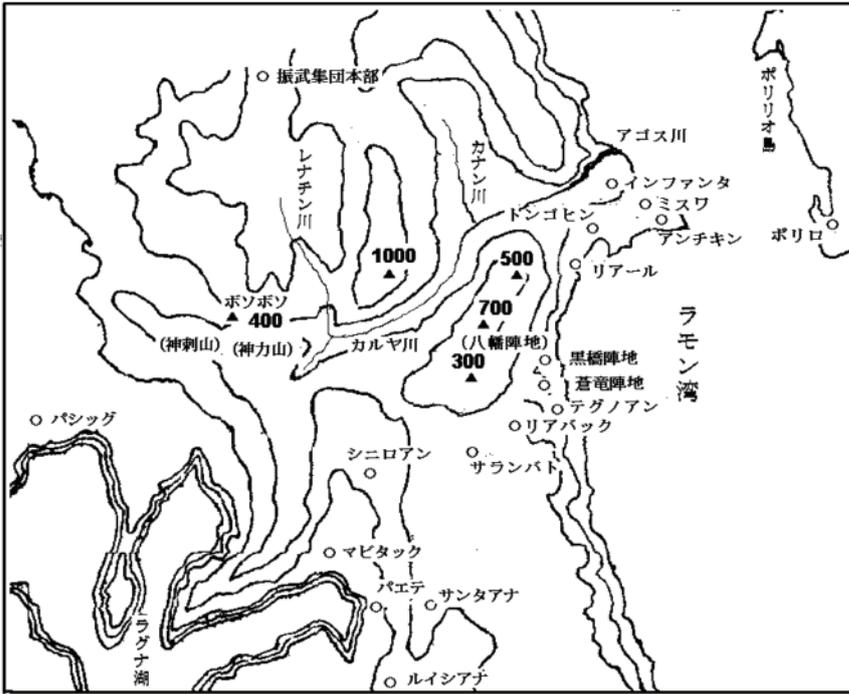
この戦隊は南方総軍の計画によれば、当初はルソンではなくホロ島（ボルネオとフィリピンの間）と予定されていたが一四方面軍はルソンに集中する方針としたため、東部ラモン湾に変更されたものである。

爾後同地において訓練を行なっていたが、昭和十九年十二月五日に行なわれた夜間海上演習で、舟艇一隻が不明となる事故が発生し、第三中隊の木村群長と隊員二名が未帰還となった。

昭和二十年一月になって、基地大隊はマニラ地区防衛兵力及び木暮支隊（第一海上挺進基地隊長木暮中佐の下に編成された部隊）に転用されることになり整備中隊の一部を残して転出していった。

基地隊が手薄になったので、第一中隊はアンチキンよりミスワに移動し、戦隊と民間人居住区域間の分哨等の勤務にも就いた。

この地域の兵力が手薄になったのを知ってかゲリラの出没が激しくなってきた。一月二十五日以後二月初旬まで、これに対する討伐を行なったが、一月三十一日夜の討伐戦で上法戦隊長が戦死するといふ事件が発生し、第一中隊長市原大尉が



戦隊長代理に就くことになった。
 又、二月下旬から四月上旬までの間に、空襲等により相当数の舟艇を失った。
 三月に入ってからマニラ方面より転進してきた古瀬貴季海軍大佐指揮下の海軍部隊約三千名がインファンタ、トンゴヒン地区に入ったため治安は良好となった。

この間に、第七戦隊等のマニラ斬込みにより不要となった残存舟艇を受領した。戦隊の海上行動としては三月下旬に、第一中隊第二群長於保忠彦少尉(幹一〇)と西村伍長(特幹)が、ポリリオ島を拠点としてラモン湾に出没する米砲艦等を攻撃するため出撃したが、会敵せず出撃者は無事生還し、帆船を一隻捕獲する成果があった。

四月上旬になって、米軍のラモン湾からの大規模な洋上進攻がないものと判断され、残存の舟艇全部を処分して陸戦の態勢をとった。すなわち、主力はリアール西部の通称八幡陣地(標高三〇〇〜七〇〇米)及びその周辺に、第二中隊(中隊長林毅少尉)と第一中隊第一群(群長滝本信夫少尉)はテグノアン附近に、それぞれ陣地を設定して陸上よりの米軍の来襲に備えた。

木暮支隊の守備していたサランバト峠を突破した米軍は五月十二日東海岸に達し、テグノアンを守備していた第二中隊等と東海岸にての最初の交戦となり、ここで第二中隊藤井八郎、衛藤成良両少尉及び特幹数名が戦死した。

続いて進攻してきた米軍は、五月十五日八幡陣地周辺に達し、海上からの砲艦による援護射撃のもと、ここで本格的な戦闘となった。第九、第一〇戦隊は若干の基地隊残留者、ボソボソ方面より転進してきた一〇小隊等と共にこれを迎撃した。ここを突破した米軍は数日でリアールに、二十五日には海軍部隊の守備するインファンタに達した。

戦隊は八幡陣地を拠点として第一〇戦隊とともにリアール地区の米軍陣地へ数度の斬込を行った。ここでの戦闘で第一中隊高瀬富太少尉他七名が戦死した。六月に入って食料が欠乏したため、同陣地を出て海岸に近いテグノアン通称蒼龍陣地及び黒川・黒橋陣地等に移動し、自活を行ないながら戦闘態勢を維持していた。特に七月七日にゲリラの一隊に襲われ、特幹の隊員三名(三浦、北、今村、)が惨殺された。これの弔合戦として同月九日、米軍巡察隊を包囲奇襲して約三〇名を全滅させ、多数の兵器等を鹵獲する戦果があった。

又、六月初旬第一〇戦隊武生少尉以下約三十名が、アゴス川上流脊梁山脈を越えて振武集団本部に兵器受領のため出発した。このうち、九戦隊からは兼勤隊(基地隊員であるが、戦隊の経理事務等を行ない、戦隊と行動をともしていた。)

の木田曹長以下十数名が命令により参加した(特幹九名、基地隊員他数名)。七月末になって武生少尉以下一〇戦隊の者は帰任したが、(振武集団には達せず)九戦隊から参加した者は一名(生還)を除いて他の者は未帰還となった。(原因ならびに生死不明 昭二〇年八月一日アゴス川上流戦死となっている)

八月八日に主力の健在者は、木暮支隊直轄の隊として特別挺進隊の編成を命ぜられ、第七・八戦隊員(残員)及び第一〇戦隊員の一部とともに十数日かかって脊梁山地の密林地帯を横断し、八月下旬ラグナ湖を望見するパエテ東方山地(サントアナ)に達し、ここで木暮支隊本部と合流、既に戦争終結の情報があったが、一部をここに残し、本隊は木暮支隊長と共になお南下を続けバナハオ山近くのルイシアナ東方高地迄達し、同地区で戦闘待機中、九月に至って停戦した。

なお、サントアナ地区には野口兵団本部がレナチン川上流のレイハン方面より転進して来た。

又、東海岸に残留した十六名は第三中隊長加藤中尉が指揮して、第七戦隊第一中隊長斎藤大尉の指揮下に入り、テグノアン付近でゲリラ部隊との戦闘を繰返し、生還者一名(二十一年六月生還)を残しほとんど戦死、病死した。

同戦隊の戦死者は、将校七名、隊員六

七名の合計七四名であり、ほかに転属者一名があった。

海上挺進基地第九大隊は、昭和十九年八月三十一日宇品において、浜崎珠璣大尉を大隊長として編成され、中隊長としては吉田文治大尉、佐々木正人中尉等がおり、通称号は暁第一六七九六部隊、ルソン島に渡ってからは防諜名として第九漁撈大隊と称した。

なおこの大隊は、当初の計画ではホロ島と予定されたため、大隊長は九月にホロ島に着いて基地設営個所の視察を行なった。九月十日輸送船三隻に分乗して門司を出航(主力の乗った輸送船には、大隊本部、第一、第三中隊と、整備中隊のうちの一コ小隊が同乗)したが九月二十八日に第二中隊の乗船した大敏丸が、バシー海峡で米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、この事故で七名が戦死した。

十月六日、主力はマニラに上陸し、大隊長も十八日に空路でホロ島から帰り、約一ヶ月の間マニラで隊員の教育と、展開後の作戦準備に従事していたが、同月下旬になって東部のインフアンタ地区に最終的に基地決定となったので、同地に移動し、同地区で陣地構築と舟艇秘匿作業を行っていた。

基地での基地隊員は防諜上平常は民間人と同じ服装をしていた。

二十年一月二十日になって、マニラ地区防衛兵力に転用する旨の命令を受け、ここで兵力は二つに分かれることになり、本部及び第二、第三中隊の部隊主力は、振武集団の指揮下に入ることとなって、インフアンタ地区を撤収してリサール州ボソボソ平原に移動を行ない、米軍との戦闘準備と、その付近のゲリラ討伐を行っていた。

そして三月十五日からは、マニラを占領し主兵力を東方山地に向けた米軍との本格的な戦闘となり、浜崎大隊長は十七日に戦死し、副官の秋月演授中尉が大隊長代理となって、野口兵団に属している飛行大隊長の鈴木権三郎少佐の指揮下に入ったが、この地区の戦闘で兵力の約三分の一が失われた。

その後三月二十日から六月十日までの間、大隊主力は通称日光山、神刺山、神力山及び武烈山などで、数次にわたる斬込戦闘を行っていた。

六月十七日から七月中旬まで、振武集団長の直括部隊となり、依然同地区で遊撃戦を行っていたが、七月二十日に至り、残存の主力は全員で米軍陣地に斬込みを決行することとなり、ここでほとんどが戦死した。

一方本隊と別れた第一中隊と整備中隊の第一小隊は、基地第一中隊長吉田大尉が指揮者としてサランバトに前進し、木

暮支隊長（第一海上挺進基地隊長）の直轄中隊となっていたが、四月四日マニラ方面からマビタックに進入してきた米軍を迎えて、戦闘状態に入り、五月七日までサランバト峠の通称南光山陣地で、米軍の猛攻に対して同陣地を一カ月にわたって死守する戦闘を行なったが、この間の戦闘で兵力は三分の一以下となり、五月八日支隊本部へ「最後の総反撃を行う」旨の連絡があり、それ以降守備隊の消息は絶たれた。

また整備中隊は、九月十八日宇品を発ち、十月五日台湾高雄に、十一月九日マニラに着いて、十二日にマニラ市に上陸し、十七日からラグナ湖畔のパシッグで戦隊の舟艇整備を行ない、その後十二月一日インフアンタ地区のミスワに移動し、舟艇の整備作業を行っていた。四月からは戦隊と離れ第一〇大隊の整備中隊とともに、木暮支隊に属して、四月七日基地第一中隊の所在するサランバト陣地に移って、同中隊とともに米軍及びゲリラ隊との戦闘に加わった。

（なお別の資料によると、第九大隊杉本隊は、マニラ上陸後もマニラ市内にあって、二月の段階でマニラ防衛隊Ⅱ野口大佐の指揮Ⅱの一部として同市で戦闘を行なったとされている。）
同大隊の被害状況は、総員九〇二名中八〇七名が戦死し、九五名が生還した。

私の戦時体験

元海上挺進第九戦隊所属 中溝二郎

私は昭和十九年四月十日船舶兵特別幹部候補生第一期生として香川県豊浜町の教育隊に入隊した。

私は特幹隊では第五中隊第四区隊に編入された。

昭和十九年六月教育隊は香川県豊浜町から小豆群土庄町に移転した。

特幹隊では船舶隊の下士官として必要な基礎教育を行われ、十九年八月二十五日に卒業式が行われた。

然し、教育隊の教育期間中（八月中旬頃より）に、海上挺進戦隊の第一戦隊（第十戦隊までの仮編成が行われ、私は第九戦隊第一中隊第三戦闘群（群長 高瀬 富太見習士官 群長以下九名）に所属した。最初に編成された第一、第三戦隊までは卒業までに小豆島近傍の豊島にて既に①舟艇の演習を行っていた。

私共は彼等の演習状況を見学して、海上挺進隊の戦闘方法を確認した。

教育隊卒業

八月二五日の卒業式後より、五日間の外泊休暇を得て各自故郷に帰った。

休暇が終われば戦場に行く事、任務は小型舟艇にて敵船に必死の体当たり攻撃を行う事、勿論生還は望めない事は覚悟していたが、家族にはその任務を告げず、

密かに別れを告げて部隊に帰った。

特攻訓練

教育隊を終了して帰郷後再び小豆島に集合し、海上挺進戦隊の訓練を豊島において行われた。

実際の戦闘では殆ど夜間の出撃になると思われるので、夜間の演習もたびたび行われた。最後の仕上げは夜間に戦隊の全艇が装甲艇の先導により豊島付近を一周して終わった。

海上挺進隊の任務については、耐水ベニヤ板製の小型舟艇（巾1.8m、長さ約5.6m、速度は20〜25ノット（時速約35〜38km/h）の両脇に120kgの爆雷を一ヶ宛取り付け、敵輸送船に最接近してこれを投下し、急速にUターンして、敵船より離れる。（爆雷は投下されてから約四秒後に爆発）。

この様な戦闘は敵の砲火をくぐっての攻撃になり、舟艇には何の攻撃兵器も備わっていないから、敵の魚雷艇等による攻撃を受ければ殆ど戦死を覚悟しなければならぬ。（従って、後に特攻兵器とされたが、戦隊の編成当時は未だ特攻という言葉はなかった。）この小型舟艇を

防諜上①と呼んでいた。①のレは連絡艇の頭文字をとったものと思われる。

又、海上挺進戦隊の現地基地には海上挺進基地大隊（約千名）が先行して基地の設営等の作業を担当する事になってい

た。 動員下令、出陣

訓練は約一週間位で終了し、戦隊は小豆島を出発し、輸送船で広島県の宇品に到着。此処で正式に海上挺進第九戦隊が編成された(動員下令)。幸ノ浦において新しい軍装を支給された。私達隊員に支給された兵器は小銃ではなくて二六年式拳銃(六連発で弾倉が丸く蓮根のような形の拳銃)及び四〇年式軍刀(騎兵などに支給されていたサーベル式の軍刀)と、各群に一丁宛の一〇〇式機関短銃(三十発連射できる小型の機関銃、銃弾は将校に支給された一四年式拳銃弾と共用できる)であった。

戦隊は輸送船メルボルン丸に乗船、そのまま外地に行くのかと思っていたが、門司に到着、上陸して小学校の校舎に宿泊して待機(戦隊に支給される舟艇、爆雷等の到着待ち)することになった。

内地出発(十九年九月下旬)

門司港にて舟艇受領後これを私達の乗る輸送船に積載。輸送船の乗船区分は、戦隊本部、第二、第三中隊は永和丸に、第一中隊はハンブルグ丸にそれぞれ分乗することに決まった。

九月末頃門司港を出発した。乗船中私達戦隊の者は交代で対潜監視と船内衛兵の勤務に就いた。船内衛兵は衛兵長以下十名ほどが常にブリッジ横の定位置に着

いて、船内の警備に当たったが、航海中は形式的なものであった。

各人は何時魚雷攻撃をうけても直ちに退船出来るよう支給された軍刀は鞘に紐をつけて肩に負う様にし、拳銃・水筒(長時間漂流したときの為に常に水を入れておく)・雑囊(中には携帯口糧として支給された米・乾パン(これは命令がなければ絶対口にしてはならないもので、見つかつたら厳罰と聞かされていた)や缶詰等を入れてある)等を身につけ又、鉄帽を身辺において警戒していた。

沖繩の沖を過ぎ、約一週間掛かって台湾の高雄港に着いた。

台湾沖航空戦、船団は香港に退避

この頃「台湾沖に敵機動艦隊現る」の情報があり、船団の各船は兵員の半数くらいを上陸させて船足を軽くし、香港に向けて出帆待避した。

その頃、台湾沖では航空戦が行われていた。これを「台湾沖航空戦」と称されているが、この戦闘で、多くの陸海軍の飛行機が失われたようである。然しこの時、我が海軍は戦果を極めて過大に、又我が方の損害を過小に報じた。これを信じた陸軍は爾後の作戦において大きな誤りを犯すことになった。

十月末に又高雄港に戻ったが、港は空襲で散々に破壊されていた。
バシー海峡にてハンブルグ丸が被雷

海中に退避

台湾とフィリピン間の海峡をバシー海峡と称している。大戦末期この海峡にて我が方の多くの輸送船が米潜水艦の餌食となつて沈没し、南方への兵員や兵器等の輸送に大きな障害となつた。俗に「魔のバシー海峡」と呼ばれていた。

十一月一日に船団は高雄港を出港、翌二日夕、市原中隊長から、「船団は米潜水艦に取り囲まれたとの情報があるので、対潜監視についている者は警戒を怠らないように、又、本船が魚雷攻撃を受けるようなことがあつても直ちに退船できるような準備しておくよう」指示があつた。いよいよ魔のバシー海峡にさしかかるのであつた。

夜中の十二時頃と思われたが、突然「ブー」という汽笛が二回ほど聞こえ、一瞬後に、私達の乗船全体を揺るがす衝撃ともものすごい水しぶきを浴びた。瞬間「この船にも魚雷が命中した、轟沈して海中に沈んだのか」と思ったが、その水しぶきは魚雷が本船に命中した時のもので、本船は未だ浮かんでいた。然し、今まで断続的に「ゴトゴト」聞こえていたエンジンの音が止んで静寂となつていた。エンジン室に海水が流れ込んでエンジンが停止したものと思われた。船は暗闇の中に静かに浮かんでいた。

私は本船が今にも沈むのではないかと、

雑囊や拳銃等の装具と救命胴衣を身につけ、軍刀を失わないように肩へ掛け、鉄帽を被って、海へ飛び込む用意をした。一緒に航行していた僚船はもう一隻も見えなくなっていました。

市原中隊長は落ち着いて九戦隊の集合を命じた。皆が甲板に集まったところで、「みんな注意をして飛び込め」と云う趣旨の訓示を聞いた後、筏（予め太い木で三角形や四角に組んで甲板に配置してあった）を海中に投入し、それをめがけて一斉に飛び込んだ。

翌日昼頃海防艦に救助された。結局この時第一中隊で海没戦死した者は第二群の渡邊一人だけであった。

救助された陸軍兵達はここで分かれて輸送船に分乗した。私達は戦隊本部の乗っている永和丸に乗船した。

永和丸に乗船後は一夜嵐に見舞われたが二、三日後に無事マニラ港に入港した。マニラ港は空襲の後も生々しく、沈没した輸送船のマストのみが沢山林立しているに吃驚した。こんなにやられているとは想像もしていなかった。

私達は、日本を発つてからマニラにたどり着くまで紆余曲折、一ヶ月以上の日時がかかったことになった。

マニラにて
マニラではリサル運動場（と思うが、名前はよく覚えていない）に一週間ほど

待機していた。ここで、私達は必要な軍装を再支給された。待機中もマニラは連日の如く空襲があった。新しい輸送船団がマニラに着くとすぐに空襲があった。然し永和丸に積載していた九戦隊の舟艇は無事揚陸され、マニラ港で再配分された。

戦隊の舟艇は高射砲等の破片によるものと思われる若干の破損はあったが、殆どの舟艇は無傷で無事であった。

舟艇の再分配をうけた後、私達はラグナ湖からマニラ湾に流れ込んでいるパシッグ川を遡上した。受領した舟艇はマニラから五隻位宛小型の機帆船（船舶兵の大発であったかも知れない）で曳航して、パシッグ川を遡上しパシッグと言う部落に集結した。（十一月十五日頃）

私達ハンブルグ丸が海没した時一中隊の舟艇も一緒に失われたが、永和丸に積んでいた九戦隊の舟艇約七十隻くらいは安全に揚陸された筈であった。然しマニラにて受領したときは若干減って五十数隻になったと思う。（海没で舟艇のない戦隊もあったようで、これらの戦隊に分割支給されたものと思う）従って舟艇は二人に一隻となり、改めて各自の受け持ちの舟艇が割り当てられ、舟艇を稼働できるよう整備を行った。

此処にいるとき私達特幹一期生は伍長に昇進した。又、ここで比島派遣軍司令

官山下大将の閲兵を受け、舟艇の実技演習を見ていただき、訓辞を受けた。ここから最後の航空郵便を内地に送った。（私のこの郵便は内地の母に届いていた。母は返事を出したそうであるが戦局の急変で受けとることはできなかった。）

マニラ（インファンタ（アンチキン）

パシッグでの滞在中に舟艇の輸送段取りができたのか、十一月下旬トラック一台に舟艇一隻宛を積み込み、トラックには運転手の他に、警備の兵一名・戦隊の下士官二名が荷台に同乗して、数台宛逐次パシッグから東海岸に向けて出発した。途中いくつかの部落や町を通過し、ルソン島の中央山脈（サランバト峠：後日（二十年三月）、基地大隊の第一中隊（吉田大尉指揮）が此処で米軍を邀撃し、約一ヶ月間持ちこたえた激戦地である）を越え、夕刻に東海岸のリアールという漁村に到着、舟艇をおろした。（このリアールが後日我々の戦場になるとは夢にも思っていなかった）

ここに全隊員が集結するのに二、三日かかったと思う。戦隊の内、戦隊本部及び第二、第三中隊はインファンタ地区（ミスワ）までトラックで陸送された。私達一中隊の目指すアンチキン（地名は後で知った）へはインファンタよりトラックの通える陸路がないためリアールから海上輸送しなければならなかった。舟艇

は十数隻宛機帆船に三列に並べて曳航され、夜間航行で目指すアンチキンに向かった。東海岸は丁度雨期で、一晚中雨でずぶ濡れであった。アンチキンに着いたときは夜が明けていた。

海上よりインフアンタに行くにはディナヒカン岬よりインフアンタに通ずる広い川(川幅二十〜三十米)があり、この川を遡上するとミスワ(インフアンタ)の船着き場に達するが、アンチキンはその途中に存在する部落である。この川は感潮河川で(川と云うよりも水路か)、海の潮汐(干満)の影響を受け、水は全部海水であった。又、水路の両側にはマングローブの木(主として熱帯の潮の影響を受ける水中の、泥の中に根を張っている植物)が群生していた。

一中隊の舟艇壕は予め基地大隊が掘ってあった。マングローブの群生の中を各舟艇一隻くらいの広さに伐採・掘削してそれぞれの舟艇を秘匿するようにされていた。舟艇壕より陸地の船着き場までの往復は基地隊員の漕ぐバンカー(カヌーに似ている丸木船)に同乗して送迎してもらおうようになっていた。

アンチキンにて

第一中隊はアンチキンに駐屯したが、戦隊本部及び二、三中隊はインフアンタの町より約二km離れたミスワに駐屯していた。ミスワとアンチキン間は水路では

約一kmくらいであるが、陸路は椰子林や田圃続きで約四km、歩いて一時間の距離である。その間は人が通れるくらいのおざ道や狭い道路しかない。

前述のように、当時この地域は雨期で、アンチキンに来てからも毎日どんよりとした空模様が続き、連日雨が降っていた。低いところの道路は湿地帯のような泥沼になっていた。大詔奉戴日(十二月八日)に宣戦布告の詔勅の出た日、毎月この日は戦隊本部に集合して、詔勅の奉読が行われた)の時や、戦隊全部による演習の時などは、戦隊本部に集合しなければならぬが、約一時間の行程を、雨の中、泥沼のような所を行き来するので、帰隊してから衣服を乾かしたり、靴の掃除等大変であった。

又、殆ど毎日演習や舟艇整備の為、絶えずぬかるみの中を歩いてきたのが原因であろうか、殆どの者が足に吹き出物ができた。(熱帯潰瘍とか疥癬とか称していた)

戦隊がこの地区に到着したときは戦隊及び基地大隊の居住する、ミスワ、アンチキンの各部落及びこの双方の連絡地帯の原住民は既に全部退去させてあった。これは海上挺進戦隊が秘密部隊であり、敵側に我が方の兵力や兵器・戦法等を知られないためであるが、同時に我が方の兵隊等が原住民と接触することも固く禁

じられており、憲兵が常駐して監視していた。又、防諜上であろうか、基地大隊員は大隊長以下民間人の服装をしていた。(便衣といていた、上はTシャツ、下は普通民間人のズボン、帽子も様々な民間人の被っている物)

当時はもうレイテ戦の真つ最中で、今まで日本側に友好的と思われていたフィリピン人が実は殆どが反日で、極秘裏に結成されたゲリラ等が米軍に協力をしていてといった状況が戦訓として報じられてきた。

十九年十二月付けで市原中隊長は大尉に昇進された。

一中隊は此処で一ヶ月間程待機していたが、その間戦闘訓練や舟艇整備に明け暮れていた。

又、海上に於いては戦隊全艇で夜間出撃から戦闘隊形、突撃等の演習も行った。

十二月五日の夜間演習の際、第三中隊の木村群長艇の行方がわからなくなった。翌日も三中隊の加藤中隊長はじめ若干の舟艇が付近の海上を搜索したが遂に見つからなかった。この艇には柴田伍長と長谷川伍長の二名が同乗していた。

まもなく、各舟艇には爆雷を装着された私の舟艇には艇尾に発煙筒も付けられた。出撃して突入の際、煙幕を張って、敵方から見えにくくするためである。

これでいつでも出撃できる準備ができ

た。舟艇には二人乗ることになったので、爆雷の取り付けは舟艇の両側にロープでしっかりと括り付け、投下するときは同乗していた一人がロープを切断して投下させるように工夫された。従来は一艇一人を前提としていたので、爆雷は、操縦している乗員が直接レバーを引いて落とすようになつていたが、爆雷を装着している機構が錆で固くなるのと、爆雷の重みで、動かないのではないかと心配をしていたがこれで安心した。

出撃準備

ある日敵機動艦隊が接近しているとの情報で、出撃準備の命令が出された。戦隊の全舟艇が集合し出撃の命令が下るのを待った。出撃命令は直ぐには出なかつた。待機している間に種々なことが頭に浮かんで来た。今まで心の隅に押し込んであった本音が頭を持ち上げて来た。又今までの間で楽しかつたことや苦しかつたことが、思い出されて来た。

何時間か経過してから「解散」の命令が聞こえた。機動艦隊は遠ざかつたのとこのことであつた。

この時は本当に出撃すると思つて、緊張の極に達した。恥ずかしながら初めて死に対する恐怖・疑問を痛感した。今迄死ぬ事は大したことではないと思つて来た。しかし直面して初めて分かつた。死への疑問はこれからもずっと持ち続けた。

国への忠誠心はどうなつたのだ。精神修養が足りなかつたのだ。いくら考えても結論が得られなかつた。結局は割り切らねばならない、諦観（あきらめ）する事にし、「出撃しても自分は敵弾に当たらない。敵船に対して爆雷攻撃をした後、基地に帰つてもう一度爆雷を積んで攻撃に出るのだ！」と堅く信じ、「恐れずに突入することだ」と心に決めた。

私達第一中隊は此処で正月を迎えた。各群長は見習士官から少尉に任官された。マニラ周辺の戦闘が激しくなつて、一

月中旬には基地大隊も主力（二、三中隊）が振武集団（横山静雄中将の指揮下に、比島中南部の守備に当たつて兵団）に転出を命ぜられ此処を出て行つた。

この基地大隊は振武集団麾下にあつて、マニラ東方山地（ボンボン）アンチポロ方面の山地）で戦つていたが、ほとんどが戦死し全滅状態となつた。

基地大隊が移動し、手薄になつたのを察知したのかゲリラの蠢動（しゅんどう）が活発となり、インファンタの状況も不穏となつて来た。

元々インファンタ周辺から西へサランバト峠辺りまでは沖田支隊という部隊が守備に当たつて来たよう、占領当初の平和な頃には宣撫班も来て住民に日本語を教えたり愛国行進曲等を教えたりして来た様であつた。私達海上挺進第九戦隊

がインファンタに、第十戦隊が隣接するトンゴヒンに配備され、それぞれの基地大隊（第九、第十基地大隊）が来たので、沖田支隊はここから撤収してマニラ東方地区の守備に回つたようである。

ラモン湾の東にポリリオ島という比較的大きな島があり、此処も一時は沖田支隊の一部が守備をしていたが、本隊と共に撤収して居らなくなつたので、密かに結成された抗日ゲリラの巣窟となつて来た。夜間には米潜水艦が兵器やたばこ、食料品等の物資を供給していたようであるが、戦隊や基地隊はこの島を占領するのが目的ではなかつたので放置され、状況は詳しくはわかつていなかった。

然しこのゲリラが、インファンタ周辺に入り込んで来たとの情報が頻繁にあり、二回ほど住民部落の奥深くアゴス川近辺まで討伐に行つたが、情報が漏れたのか、敵方がうまく隠れてしまつたのか、ゲリラを一人も捕まえることはできなかった。

基地大隊主力が転進したので、基地作業及び警備その他が手薄となつたので、一月中旬に一中隊はミスワに移転し戦隊本部、及び二・三中隊と一緒になつた。

ミスワにて：戦隊長の戦死

ミスワに移つた頃から雨期が明けてきて晴天の日が続いた。ミスワは海からの水路の末端になる。此処までは舟艇は勿論であるが、小型の

貨物船や漁船が出入りでき、岸壁の近くには倉庫があった。平時にはここからコプラ（ヤシの実を乾燥させた物、これからとる油を石けんの材料等に使っていた）等の貨物を搬出していたそうである。ここから先は細い水路があるが、バンカー以外は通れない。

ミスワからインファンタの町までの距離は約二km 一直線の道路でつながっていて、道路の両側は見通しの良い広い田圃であった。

ゲリラの討伐に行つたとき、初めてインファンタの町を通過した。インファンタの町はしっかりした建築物が立ち並んでおり、商店等もあつて、この地域の中心の町であることを知つた。ミスワやアンチキンで多く見受けられる、草葺きの小屋のような素朴な農村部落と全く異なる様相であつた。

基地隊は第一中隊と整備中隊だけが残つていたが、まもなく第一中隊も第三小隊を残して転出した。

此処では舟艇は船台に載せて川岸に引き上げ、椰子の葉っぱ等をかぶせて偽装しておき、一日に一回 二、三時間は舟艇整備にあたり、短時間の間エンジンを吹かせて、いつでも出撃できるように準備をしていた。

一月の末頃に、当方の警備態勢が薄くなったのを知つてか、ゲリラの活動がい

よいよ活発になつてきた。インファンタの方から銃声がしばしば聞こえてくるようにもなつてきた。

一月三十日、諜報によれば、今夜ゲリラがインファンタの町に集結するのとこので、その夜、こちらから討伐に出ることになった。討伐に出発する時刻は翌朝三時頃で、準備を整えて待機していた。それまでに、潜伏斥候が出発して、インファンタの町を迂回して北側に先行し、ゲリラが逃走するのを捕捉する事になつていた。潜伏斥候は第二中隊長の林少尉の指揮のもと第二中隊の主力と第一中隊からは於保群長指揮にて第二群全員と第一、三群の一部の者（三、四名）が既に出發した。

夜中の十二時過ぎ頃であつたと思うが、突然けたたましい銃声がインファンタの方角から聞こえてきた。宿舎から見るとインファンタの町からミスワの方角に向けて機銃弾が盛んに飛んでくるのが敵の曳光弾（四、五発の間に一発宛て、弾に火薬が込められていて、発射されると尾を引いたように発光しながら飛んでゆくので弾着を確認できる）でわかつた。私達は急いで戦隊本部前に集合した。第三中隊長の加藤少尉が皆を集めてインファンタに向けて出發した。この時、戦隊本部の西川善七伍長が駆け戻つてきて、「戦隊長殿がやられた。」と報告してい

た。駆け足にてインファンタに向かつた。インファンタの町の手前三・四百米の所に戦隊長がうつぶせに倒れておられた。高瀬群長が「戦隊長殿」「リ」と数度呼びかけていたが、応答はなかつた。戦隊長は此処で戦死されたのであつた。直ぐにインファンタの町の主要な所を搜索したがゲリラはもう逃走したようで影も形もなかつた。

戦隊長のご遺体はその夜茶毘に附し、翌日戦隊員全員にてご遺骨を拾つた。

ゲリラ討伐

当日のゲリラ討伐は中止となり、数日後再度実施された。今回の潜伏斥候は於保群長の指揮するメンバーのみとなつた。その他の計画は前回通りであつた。基地隊の残留者も含めて私達はインファンタの町から暫時アゴス河の方へ各家を探索して行つた。

相当進んだ頃、突然けたたましい銃撃音が聞こえてきた。於保群長達がアゴス河の方へ逃げるゲリラの一団と遭遇したのであつた。私達は銃声のする方へ急いだ。アゴス河の川岸近くの椰子林の端に市原中隊長が居られた。河の向こう岸へ漕いで行くバンカーが見えた。ゲリラは二群達と撃ち合いながらバンカーでアゴス河を渡つて逃げてゆくところであつた。中隊長は「もう一寸早ければ奴らを捕捉できたのに」と盛んに残念がっておられ

た。アゴス河の川幅は四・五百米はあり、橋がないので、バンカーでない限り対岸には渡れない。従って対岸に逃げ込まれると此方から小銃や機関短銃では攻撃のしようがない。

当日の討伐はこれで終わった。

戦隊長が戦死されたので、先任の第一中隊長の市原大尉が戦隊長代理となり、戦隊本部付であった多々良孝宣少尉(幹候九期)が第一中隊長となった。

間もなく基地隊の第三小隊も前線に出て行った。基地には兼勤部隊(基地隊員の身分であるが、経理関係や炊事、軍医等戦隊と一緒に行動する者)と戦隊だけがとり残された。

又、基地の周辺やラモン湾からインフアンタに入る水路の河口付近に分哨があつて、基地隊が警備に当たっていたが、基地隊が出てからは戦隊員で交互に警備する事になった。

二月に入つてまもなくミスワも米軍機の空襲があつた。当所は二・三日間低空にて偵察を行い、数日後に実際の空襲があつた。この時舟艇の隠匿してある場所を重点に最初は爆弾を投下し、その後機銃掃射を行い飛び去つて行った。空襲は二日間に亘つて行われたが、私達の宿舎などには損害は無かつた。空襲は正確に行われ、舟艇は数隻を残して、殆どが炎上沈没した。又、河口分哨についていた

秋元、横山二名が銃撃の犠牲となり戦死した。

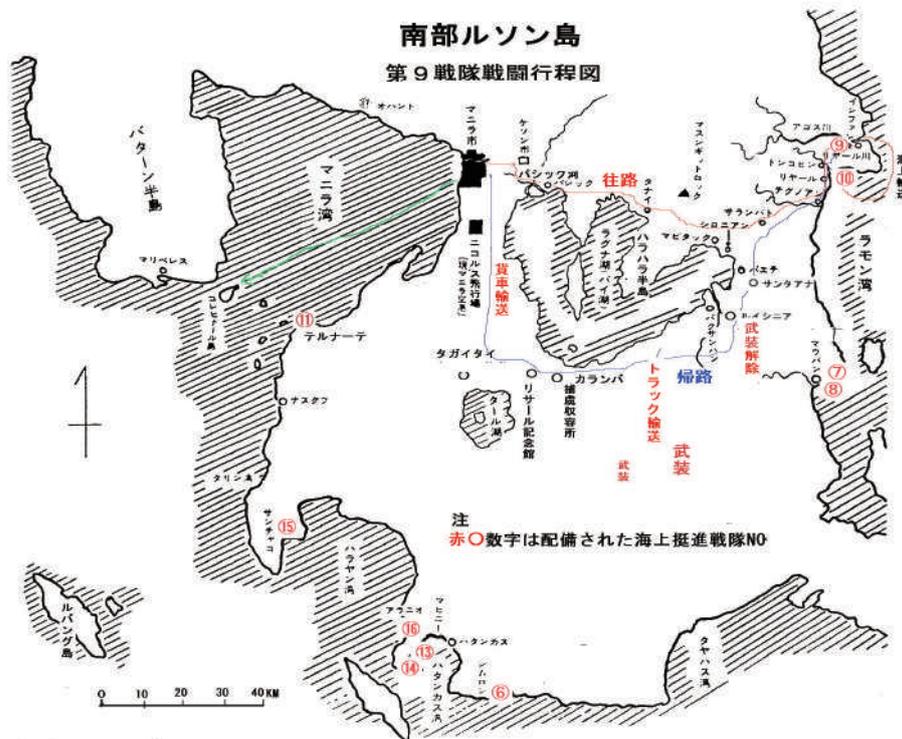
三月に入つて、マニラ方面より転進して来た、海軍の古瀬大佐指揮下の約三千名がインフアンタ市内からアゴス河右岸に駐留して来たので、

ゲリラは全くなりやを潜め、治安は良くなった。

然し、マニラも陥落し、比島の戦場はマニラ北部、南部及び東方の山地に伸びていた。米軍がラモン湾より上陸してくる公算は段々薄れ、舟艇出撃より、陸上戦闘に移らなければならなくなつた。入隊してから、陸上戦闘の教育を受けたのは豊

濱にいた初期の教育だけであつたが、幸い戦隊では、戦隊長代理の市原大尉は陸士出身の元歩兵であつたし、各群長は熊本予備士官学校卒業で、歩兵の教育を受けてこられたので歩兵の戦闘の方が専門であるから、此処で、斬込みをはじめ歩兵の

教育を受ける機会があつた。又、基地隊が残していつてくれたのか、若干の小銃(二名に一丁程度)や軽機関銃、擲弾筒等の陸上戦闘の兵器も補充された。八幡陣地にて(一)



私達もいよいよ陸戦に入ることになった。三月末頃、残存舟艇を処分し、夜間にトラックに分乗して、インフアンタより数km南のリアルに着いた。昨年十月二月マニラから舟艇を陸送してきて到着し、ここから海送したところであった。

第九戦隊は此処で、各中隊毎に任務が分かれた。戦隊本部及び第三中隊は現在地で、第一中隊は更に此処で別れ別れとなり、一群は重機関銃を持って第二中隊長林少尉の指揮下で約十km南のテグノア地区において戦闘準備をする事になった。私達一中隊第三群はリアル近傍の標高六百メートルの高地（此処を八幡陣地と称していた）に登り、既に基地隊等で簡単な建物等を若干準備されていたが、此処を宿舎にして、本格的な陣地構築の任務についた。第二群は戦隊本部及び第三中隊と共にリアル地区（八幡陣地下）で米軍との交戦準備をすることになった。

八幡陣地での主な作業。

- 1 九戦隊が蓄えていた塩等を山に運ぶ
- 2 陣地の構築

主要な位置にタコツボ（一人用の塹壕）を掘ってまわった。麓から八幡陣地に上つて来る道は三本あった。

北側のリアル方面から上ってくる道を中山道、中央の八幡山麓付近から直接山頂への道を東海道、南のキロロアン川

方面からの道を山陽道と名付けていた。どの道から米軍が攻め上つてきても応戦出来るように、適当な位置にタコツボ（一人用の塹壕）を掘ってまわった。

3, 洞窟の掘削

主要な箇所にはタコツボを掘った後、本格的な洞窟を掘ることになった。

八幡陣地で戦闘が行われた際、空襲や砲撃を待避するためのもので、最後は洞窟内に立て籠もって戦闘をすることになった。

戦隊本部より洞窟掘の名人として、山添上等兵（であったと思う）をよこしてきた。

山添上等兵はマニラ方面より転進して来た見習士官以下一団中の兵であったと思う。（彼らを遊兵と呼んでいたようである）

山添は戦前は九州の炭坑に勤めていたそう、私達が掘り進んで行った後から支柱を立てて崩壊を防ぐようにしてくれた。私達は掘削にあたる者、土を運搬して排出する者、支柱の木を切り出す者等二名ずつ交代で手分けをして作業を行っていた。

洞窟は約三十米ほど掘り進んだ所で、今度はL字型に曲がって掘った。

洞窟には主に塩と私達の装具を運び込んだが、その他に、經理の下士官は經理室の機材等も運び込んでいた。

このリアル周辺に集結していた部隊は、我々第九戦隊以外にトングヒンの十戦隊及び南のマウバンに配備されていて、インフアンタに転進して来た第七、八戦隊（一ヶ中隊のみ比島に到着、他は台湾にて終戦）等で、基地隊を含めて第一海上挺進基地隊：隊長は木暮信孝中佐（陸士三九期）の指揮下にあった。然し殆どの基地隊主力が振武集団に引き抜かれ

マニラ東方の戦闘に参加していた。残部の基地隊員は木暮支隊として国道四五五線（マニラからインフアンタに至る唯一の国道：シニロアンから中央山脈を登り、頂上のサランバトを経由して東海岸のテグノアンに至るこの間の道幅は、トラック一台がやっと通れるくらいで、大きな戦車等は対向で行き違いするのは困難）の重要な拠点サランバト峠の守備に回っていた。そのためインフアンタ地区に集結していた全戦隊の基地隊が不在となり、同時にこれらを指揮していた木暮中佐も不在となったため、この地区で先任の第十戦隊長の菅原久一少佐（陸士五一期）が集隊長として、全体をまとめており、その関係上第十戦隊が全体の中心となっていた。従って八幡陣地での食料はすべて第十戦隊が掌握していた。

他に、マニラ方面から転進して来た一部の部隊（戦隊の指揮下に入った）や、野戦病院が来たが、野戦病院は此処で解

散した。

軍医や衛生兵は戦隊の指揮下に入ったようである。

悲惨なのは負傷兵や病兵でここで放り出され、後の面倒は誰も見てくれなくなる。このあたりなら、原住民は今は無住になっているから開墾した土地や、椰子林もあり、細々乍ら自活が出来るという見通しである。どちらにしても敗戦の悲哀をつくづくと感じた。

四月中旬頃から毎日、夜になるとサランバト(南の方角)方面から砲声が聞こえてきた。はじめの頃は遠雷のようなドロン・ドロンと云うようなかな音であったが、日が経つにつれ不気味にドーン・ドーンと大きな音に代わり、これが連日続いていたが、ある日びたつと音が聞こえなくなつた。サランバトが落ちたのであった。

此のサランバトを突破されると、東海岸のテグノアンまで一本道で、防御している部隊はない。米軍資料によると、米軍は五月十三日に東海岸に達したとある。

八幡陣地下に米軍来る
不気味な静寂の日々が続いた。テグノアンにいた第二中隊はどうしたのだろうか。

八幡陣地の下では於保群長以下の第二群が市原戦隊長の命により、リアルより南へ、テグノアン方面の状況を偵察に

出発した。然しテグノアンに至る前に敵と遭遇した。テグノアンは落ちて、米軍が目前に迫つて来ていたのである。

後でわかつたことであるが、テグノアン方面で、米軍が来たとき、第二中隊が交戦、五月十二日に群長の衛藤・藤井両少尉戦死、二中隊の特幹(下士官)も前後の日に二、三名戦死した。

八幡陣地下に米軍が来たのは五月十五日頃であった。

私達は東海道と山陽道の合流点で以前から掘つてあつた壕に入つて警戒態勢をとつた。人員は九戦隊の第三群と、新たに配属されていたボソボソ方面から来たという(野口兵団の兵と思われる)梶原と言う兵長以下数名が増員された。中山道方面は第十戦隊の者が警戒についた筈である。(以前舟艇で出撃準備の際、いろいる考えていたが、今はもうすっかり忘れていた。食料は不足であつたが、歩兵の下士官として、任務を全うするといふ責任感の方が旺盛であつた)

野口兵団の兵は二八式の銃を一挺宛もつていたが、我々戦隊の者は九九式の銃であるが二人に一挺分しかなかった。二人で交代に銃を持つて蝟壺に入つた。

八幡陣地下では菅原集隊長の指揮の下に第十戦隊第一中隊(中隊長 重谷 辰美少尉)、第九戦隊第三中隊(中隊長 加藤 達少尉)他が、日野川(キロロラ

ム川)を挟んで米軍と対峙し、激しい戦鬪が行われていた。米軍が撃つ迫撃砲の音や、海からの砲艦が射つ大砲の音がドンドンドンドンと太鼓を打つように連続に聞こえてきた。激戦が行われているのであつた。

夜になると静寂(しじま)を破つてパチパチという小銃の射撃音やドーンという迫撃砲の音が一層近くに聞こえてきた。はじめの頃は夜間でも山の下で激しい戦鬪をしているのかと気を揉んでいたが、それは日本軍の夜襲を恐れた米軍が毎夜時間を決めて射撃をしているのだとわかつた。

八幡陣地下の戦鬪は長かつたように思うが、三・四日で終わり、戦鬪指揮所も引き上げられたようであつた。

八幡陣地にて(二)

食糧事情

五月に入つてから食糧事情は極端に悪くなつた。山に上げて備蓄していた米を食い延ばしするためである。約二合(約三百グラムくらい)の米を飯盒一杯の水で炊いてどろどろのお粥にしたものを四人分として、朝夕二回。それで終わりであつた。従つて一人一日に腹に入れる食物は米一合分の粥だけということになり、これでは早晚飢え死にをするという食糧事情であつた。

それ程食い延ばしをしても、山へ上げた食料は今のままで六月中旬迄しかもたないと言うことで、その後は自活をしろと言われていた。此処で自活とはどうすることなのか、その当時わからなかった。元々原住民が開墾もしていない原始ジャングルを切り開いて造った陣地であるから、此処にいては他に食べられるものは何もない。このような食糧事情では早晩餓死を待つのみであった。

当時第十四方面軍(軍司令官は山下大将)の作戦方針は“玉砕をしない、自戦自給、米軍をできるだけ長くルソン島に張りつけ、日本本土への進攻を極力遅らせる、即ち長期持久の方針であると伝えられていた。

八幡陣地攻撃さる

我々が守っていた八幡陣地に遂に米軍が攻めて来た。

五月十四日、この日も交替で警戒していた。夕方になって先に夕食を済ませた松山伍長(特幹)が蝸壺にいた私と交替した。私は銃を彼に渡すと休憩所に帰って食事を始めた。野口兵団の兵三人ほどが先に食事をとっていた。乏しい夕食に箸を付けようとした途端、百雷の一時に落ちる音とはこの事かと思われる様な、機銃と小銃音が極めて至近距離で入り乱れて聞こえた。私達が交替した時敵は既に其処に来ていたのだ。

丁度その時、分哨長をしていた三浦伍長(特幹)が壕に入って応戦していたので、その脇の窪地に這って行って戦闘の状況を見ていたが、彼の言うのには松山伍長ともう一人野口兵団の兵がやられたようだ。

松山伍長負傷す

三浦伍長が私に群長(小隊長)の許へ報告に行くよう指示した。銃撃の合間を縫って三群の宿舎に居る群長に状況を報告し、再び前線に戻ったとき松山は自力で蝸壺を這い出して来て三浦伍長の後方の窪みに居た。

彼の左胸に血がにじんでいて、苦しそうな表情から重傷だと言うことはすぐにわかったが、私にはどうしてやることも出来なかった。彼は「苦しい、殺してくれ」と叫んだ。私は「今群長の許へ連絡に行ってきたからすぐに救助が来る、暫く辛抱しろ」と言って慰めながら、相変わらず執拗に攻撃の手を休めない敵に向って、松山の持つていた銃で応戦を続けた。「此処を撤収する時は俺を殺して行って呉れ」と言っている彼に、「俺達は此処から退がらない、退がる時はお前を連れて退がる」と言って励ましていたが、内心「敵さんよ、早く帰ってくれ」と祈る様な気持ちであった(我々が応戦している間は、米軍は絶対に白兵戦に出ないことは、もっと後でわかった)

日も漸く暮れかけてきた時やっと敵の攻撃が止んだ。私達は油断無く警戒をしていた時待ちに待った伝令が来た。「後方に本隊が来ている、負傷者を退がらせろ」と言うものであった。

松山の他にもう一人の兵がやられていたが、彼は既に戦死していた。

宮本(特幹)と二人で松山を支えながら、急な坂道を百米ばかり上った後方の台地(多分赤の木平と呼んでいたところか)にやっと着いた。此処へは戦隊長以下戦隊の主力(といってもこの時は二十三十人ばかりであったが、他の連中はリアバック、テグノアン、八幡下にいて此処には居なかった)がきており重機が据えられていた。私は大変頼もしく思ったが、此処まで来ているのならもっと早く知らせてほしかった。

松山伍長の死

松山を医務室に運べということで、担架に乗せた彼を若い衛生兵兵長、宮本、私の三人が交替で狭い山道を運んだ。漸く医務室も近いと思われる急坂の下り道で、下から軍医と衛生兵の松村軍曹(後曹長生還)が登って来るのが見えた。衛生兵は手短かに松山の負傷箇所と、余り苦しがるので今し方モヒ(モルヒネのことと思う)を一本注射した事を報告していた。

死期を悟ったか松山は東の方へ向けて

くれと頼んだ。此処から遙か日本は北の方角に当たる、然し私達は何時でも日課の宮城遙拝は東に向かつて行なっていたので(満州で戦った日清・日露戦争の頃の習慣が続いていたのか)、何のためらいもなく彼を東へ向け、後ろから支えてやった。彼はもう大きな声を出す力も無くなっていたがそれでも精一杯「天皇陛下万歳」と叫んだ。それから「お父さん お母さん元気でさようなら」と力無く言った。軍医は横から「うむ よし よし」と相槌を打って居たが。若い衛生兵は「オイオイ」と声をあげて泣いて居た(優しい男だなと思った)。私も宮本も涙が出そうであったが、こんな所で泣くのは女々しいことだと思つて辛抱していた。

そして遂に「ガクッ」と息が絶えた。軍医は彼の死を確認した後、あとの処置を松村軍曹に任せて帰っていった。松村軍曹は「松山よ痛い辛抱しろよ」と生きている者に言うようにして彼の胸に包帯を巻き、処置が終わると帰っていった。

經理室の瀬戸山伍長(後軍曹生還)が一人寝ていた。事情を話して蠟燭をもらい、洞窟を掘っていた時に使っていたスコップを持って元の所へ戻った。道路脇の適当なところへ宮本と二人で交替しながら松山の塚穴を掘った。この時あの軍歌「戦友」の歌詞が想い出されてきた。松山と私は小豆島(特幹隊)の時ベッドを隣り合わせにした事もある戦友であり、お互いによく面倒を見合っていた仲であった。そしてつい先程まで元気でいた人間がこんなに簡単に死ぬものなのかと、言いしれぬ無常観にさいなまれながら宮本と無言で作業を続けた。然し、何れは自分達もこのようになるであろう事を覚悟していたので、それ以上特別な感慨は湧いて来なかつたように思う。

山の土は木の根っこが縦横にからみあつてなかなかうまく掘れなかつた。長時間かかつて漸く塚穴が掘れた、彼を埋葬し、分哨に戻ったときはもう明け方であった。リアル米軍陣地へ斬込み

け、海岸側のジャングルに潜んだが、あいにく其処は湿地帯であった。膝までの泥濘の中を数百メートル進むと湿地帯は終わり、見通しの良い場所に出たが、そこから二・三百メートル先に米軍の幕舎が見え、歩哨の立っているのが望見された。十戦隊の持つてきた重機関銃をそろそろ射撃位置まで出しているとき、米軍の歩哨がこちらの動きを發見し発砲してきた。もう一刻の猶予はない、加藤隊長の号令により、一斉射撃を行った後、突っ込んだ。米兵の歩哨は死んでいた。又、敵は怯んで後退したようであった。敵陣地内に突入した。敵の弾道は曳光弾でわかつたが、頭上の相当高いところを火の玉のように飛んでいたので、少し安心して、前進を続けた。命が惜しいとか、怖いとかの気持ちは寸分なかつた。私の駆けている右方に於保群長が何か叫んでいるのが聞こえた。又、道路を挟んで左方で、安倍伍長が何か喚んでいる声が聞こえた。この時、宮本伍長が被弾して即死。安倍が重傷を受けたのであった。私はかまわずなお駆けているとき、左腕に激痛が走った。思わず右側の椰子の木の根元に倒れ込んだが、丁度其処に二群の鈴木(英利)伍長がいた。私の左腕を素早く包帯包(内地を出陣するとき滅菌ガーゼや、三角巾(三角形の大きな布)等を包んだ包みを包帯包と称して支給された。

数日後第九及び第十戦隊は第三中隊長加藤少尉指揮の下に、リアル地区に布陣していた米軍陣地に斬込みを行った。この日(記録では五月二十九日となつている)午後斬込み隊員に握り飯一個宛を支給され、信濃川方向(中山道)より山を下った。山を下って、国道を走り抜

一度海水に浸かったが乾かして持っていた)の滅菌ガーゼで傷口を押さえ、三角巾にて縛ってくれた。傷口は弾の入ったところと出たところの二箇所あった。その頃、漸く敵の反撃が激しくなってきたようであった。於保群長が大声で、「負傷者は後退しろ」と叫んで居られた。私も大した負傷ではなかったがもう鉄砲を撃てなかつたので、於保群長の指示により後方の三叉路(インフアンタ方面と海岸方面へ行く分かれ道)まで後退した。

此処に軍医や衛生兵がいて、臨時の包帯所になっていた。隊長の加藤少尉が右上膊部(右腕の上の箇所)を負傷されてここに来ておられた。傍に高瀬群長が付き添っておられた。

敵の反撃が激しくなり、迫撃砲を撃ってくるようになった。此処も危なくなってきたので、全員急いで後方の山地に退避した。

山中で再び加藤隊長や私の治療をしていただいているうちに日が暮れた。帰る道が分からないので、その日は山中で野宿し、翌日中山道を見つけ八幡陣地に戻った。八幡陣地の近くでは市原戦隊長が出迎えておられ、軍医(斬込みに来なかった人)が注射を打ってくれた。ガス壊疽にならない為であった。その頃は食料は乏しかったが、医療品は十分あったようである。翌日から、衛生兵(松村軍曹)

が毎日治療に来てくれた。

結局この斬込みの時、第三群の特幹は山本、宮本、安部の三名が戦死した。十戦隊にも若干の戦死者が出たようだった。その後、六月五日に第二回のリアル斬込みが行われた。この時は市原戦隊長が指揮をされたが、敵は警戒を厳重にしていたのあろうか、敵前に迫る寸前に発見されて猛烈な射撃を受け、高瀬群長戦死、市原戦隊長も右手の甲を負傷され、遂に中止となり翌日帰ってこられた。

八幡陣地にて(三)
斬込みの後、第三群が殆ど全滅したので、私達が守っていた陣地は私達に代わって三中隊か、十戦隊の者が警備に当たっていた筈だが覚えていない。

この頃、もう「神風」は吹かない、日本の4式戦闘機の反撃も見込がない、「いつかこの山で朽ちてしまうのか」と思うと、誰にも話さなかつたが、母の反対を押し切って特幹を志願したのは間違いであったのかとつくづく反省した。

やがて米軍はインフアンタ地区を守備していた海軍を破り、インフアンタに達したとの情報もたらされた。

状況がやや収まった頃、保養と称して四、五名宛交代にて山を下り、米軍のいないのを確認して、海岸近くの椰子林に入り、椰子の実やバナナを採取し、(椰子の木に上れないから一本切り倒し、椰

子の実のうまい汁を飲み、又その実の白いとこを腹一杯食べた。又この辺のバナナの実は熟れても甘くならないようで、焼くか煮て食べる)椰子の木の先の方の柔らかいところ(筍のようで、少し甘い)を切り取って持ち帰った。

その頃、菅原少佐(第十戦隊長で、集隊長)の命で第十戦隊の武生少尉が総指揮をして、第十戦隊と第九戦隊のそれぞれから十数名ずつを振武集団の本部へ兵器を受領すると称して出発した。九戦隊では兼勤部隊(基地大隊員であるが、戦隊の経理事務等を行っていた隊員)の木田曹長が指揮をして第一中隊本部の西川、三群の鈴木伍長、戦隊本部の若松伍長等八名と、他に八幡陣地にいた第九戦隊基地大隊の兵や、一緒に行動していた一般兵若干がこれに参加した。

当時振武集団は、マニラ東方地区の戦闘で米軍の猛攻に抗しきれず、マニラ東方ボソボソの山岳深くに追い込まれていると聞いていたので、そんなところに行っても余分な兵器があるはずがないのに、どうして今頃そんなことを命じられるのか極めて不審に思った。

結局、彼らは振武集団本部に到達できず、途中から引き返し、八幡山に帰着したのは約一ヶ月後の七月中旬であった。

蒼竜陣地にて

当初、米軍はリアル〜テグノアン間

の海岸地帯の監視は相当厳しかったものだが（常時巡察がまわってくる等）インファンタ占領後段々と緩やかになった。はつきりと覚えていないが、六月下旬頃もうテグノアンには米軍がいらないとすることで、戦隊は離れていた第二中隊等と合流し、テグノアン付近の海岸近くまで降りて此処で各中隊、各群毎の自活をする事になった。此処を蒼竜陣地と呼んだ。

八幡陣地と一緒に守備していた十戦隊の連中も私達と一緒に山を下りてキロロラム河周辺に散ったようであった。

この辺の海岸地帯では、椰子林とバナナ畑が混在していて、採取したバナナの実を僅かの米と混ぜて炊いて主食にし、又時々見つけるパイヤ、パイナップルの実を塩漬けにして（熟して居らないが採らないでおく）と他の者に見つけられてとられてしまうので、やむを得ず未熟のものも採ってしまう）副食とした。

八幡陣地は私達九・十戦隊が退去した後も九戦隊の各群が一週間交代で山に戻って警備に当たっていた。八幡陣地の洞窟には、塩等の他、九戦隊の經理の器材等が保管されていた

私達が八幡山の警備に着いたとき、第十戦隊の武生少尉以下の振武集団まで兵器受領に行つて帰つて来た者に出会つた。しかし、十戦隊の者はほぼ全員帰つて来

たのに、第九戦隊の者は西川を除いて誰もおらなかつた。これは今でも謎である。どうして九戦隊は西川以外は帰つて来なかつたのか？ そして彼らは遂に戦隊に合流せず、生死不明のまま終戦となつた。

分哨襲撃さる：米軍巡察隊全滅

自活していた地域約一キロ位北の位置に分哨を置いて米軍の巡察等に対して警戒していたが（南のテグノアンには米軍がいなかつたので警戒はしていなかつた）、

米軍は道路の使用も全然せず（インファンタ方面には海路で補給をしていたようである）勿論巡察等もしていなかつたので少し油断をしていたと思う。平気で道路上に出て、椰子の木を切り倒してその実を採つたりしていた。記録によれば七月七日午後突然米軍の巡察数十名が海岸側より現れて、分哨が襲撃され、特幹の三浦伍長等三名が惨殺された。この日から米軍の巡察が始まつたようである。

翌々日頃、戦隊は報復攻撃を行った。

待ち伏せの場所は襲撃された場所より二キロほど北のカパロン（戦後手に入れた地図でこの地名が分かつた。）というところ、この辺の地形は道路の一方が山、一方が海岸で、一般には海岸一帯は直接椰子林になつてすぐに海になつていて、ころが多いが、此処は道路から海岸まで四・五百米の間は田んぼで、原住民が退去して何も栽培していなかつたので開け

た草原になつていた。又一方、山側はなだらかな斜面にバナナ等が植えてあつて待ち伏せに丁度よい地形であつた。

九戦隊の約五十名は早朝より此処の道路が見下ろせる斜面に散開して待ち伏せをしていた。当時の我が方の武器は一丁の軽機関銃と、二人に一丁くらいの小銃で、他は拳銃くらいしかなかつた。

昼頃に、何も知らぬ米兵がガヤガヤ喋りながら、前の道路を通り過ぎようとしていた。彼らの列が眼前一杯に入った頃戦隊長のいた辺りから「ピー」と笛の合図、同時に一斉射撃が始まつた。目の前にいたものを射つのであるから当たらずが、射たれた米兵（殆どが若いゲリラ兵：現地人で米軍の装備をした兵隊をゲリラ兵と呼んでいた。）で負傷したものは、「ピーピー」と悲鳴なのか、泣き声なのか何やら分からぬ声を上げて逃げまどつていた。これを狙い撃つのであつた。暫く射撃をしていたが、「突撃準備！」と戦隊長の声、その後「突撃に進め！」の号令で、「うわー」とばかり一斉に斜面を駆け下り、遺棄された物や敵の死骸から兵器を奪取した。

攻撃が終わわり、奪つた兵器を道路上の片側一杯に並べた。銃の数は三十丁以上あつた。大変な勝ち戦であつた。これを整理し各隊に分配する間私達は道路の片隅の草叢に座つて待つていた。鹵獲兵器

の分配が終わった。第九戦隊はこれで殆どの者が小銃を持つことになった。私も日本軍の九九式の小銃を持っていたが、早晩弾が無くなって使えなくなるところであったので、これを捨てて米軍の小銃に換えた。米軍の弾は以前米軍陣地の後へ行つたとき重機関銃の長い弾帯がグルーッと巻いて捨ててあつたのを拾ってきて保管していたので、充分にあつた。

それから二・三日後、二群は又約一週間八幡陣地の警備に着いた。

警備が終わって再び蒼竜神地に帰つたとき、情勢は変わっていた。米軍の巡察が毎日来るのであつた。そして、私達が宿舎にしていた付近まで上がってきて、異常はないかを確認した後引き上げて行く日が続いた。これでは安心して自活ができない。

急遽自活地を変更することになり、翌日夜、住み慣れたバナナ林を後に、そこから北へ三キロの黒川上流に移動した。此処で十数日過ごしたと思う。

此処での出来事は北島、関根、遠藤が相次いで亡くなったことであつた。此処でも長くはおれない。いつ敵に発見され襲撃されるか分からない。将来問題として、北上するか、南下するかどちらかに決めなくてはならなかつた

南部へ転進

戦隊は南下に決まつた。情報によれば

南部の南光山と言う所には木暮支隊本部があつたが、今でも本部は健在のようであつた。木暮支隊本部と連絡がとれ、命令があつたかどうかは私達隊員に知らされなかつたが、木暮支隊直轄部隊として合流することになった。南光山へは約一週間くらいの行程だそうで、私達はその行軍の間の食料の備蓄のためいろいろ工夫をした。手持ちの米はもう二、三合くらいしかなかつた。

第一に必要なものは塩であつた。塩は第九戦隊の洞窟に保管してある。ここを出ると塩の補給はのぞめない。このため出来るだけ大量に携行してゆくことになり、八幡山の洞窟で塩を確保した。八月八日未明、戦隊は南部ルソンに向けて出発した。

この時の人員は九戦隊市原隊長以下二十九名、兼勤隊：基地隊員古賀曹長以下若干名、第八戦隊群長の小島少尉、第十戦隊員特幹菅原、奥中他若干名、吉見軍医少尉、松村衛生曹長等合計四十数名であつた。

残留者は第七戦隊中隊長斎藤大尉の指揮下に入つてこの地で戦つていたが、その後第九戦隊の西川伍長のみ昭和二十一年六月に生還した。他のものは残らず戦死したものと思われる。

第一中隊長多々良少尉と麻生伍長は残留組であつたが、私達の出発後、後を追つ

てサンタアナに到着此処で終戦を迎えた。各戦隊毎の残留者の人員のみ列記すると以下の通りとなる。

第七戦隊

斎藤大尉以下将校二名 特幹七名

第八戦隊

特幹七名

第九戦隊

加藤中尉以下将校二名 特幹十四名

第十戦隊

将校四名 特幹三名

この人達のうちで生還者は九戦隊の西川一人だけで、他の人はどのようになつたのかは一切不明である。当時、これらの中には病気等で歩行困難な人もいただろうが、全員ではなかつた筈で、移動した九戦隊と行動を共にして居ればもつと多くの隊員が生還できたものと思われ残念である。残留者に対し深い哀悼の意を表し御冥福をお祈りする。(人員等は戦後確定)

南光山に向かう約一週間の行程は正に悲惨そのものであつた。手持ちの米が少くない為、携行してきた芋蔓等の葉っぱに僅かの米を入れて、薄い粥にして朝晩の食事にした。(勿論一日二食であつた)そして、行程は道と云えないような山中の起伏の多い間道であつた。

漸く南光山と思われる地点に到着した。南光山陣地と言つても仮小屋が二・三棟

あるだけで、戦鬪の為の陣地や蝟壺・洞窟等は何も見あたらなかった。木暮支隊長は此処で、サランバト方面の指揮をしていたのであろうか？

私達が此処に着いた時は誰も居なかったように思う。木暮支隊本部は更に南の方に移動した様であった。

木暮支隊本部に着く 終戦

木暮支隊本部はパエテ東方のサンタアナという所に移動していた。

此処へは南光山陣地を出発してから三日目くらいに到着した。途中一群の中迫が自決した。マラリヤに罹っていて行軍について行けないので、思いあまつての自決であった。他に二中隊の浅見も戦没した。サンタアナにつく直前であったのに残念なことであった。

サンタアナは山岳部でも比較的開墾され、開けていた土地であった。

此処では少し山を下りると、原住民の栽培しているカモテ畠があった。(カモテとは正式にはカモテ・カホイと言って人間の背丈くらいの木の根っこに出来ている太い大きいイモのことで、原住民は米の他にこのイモを主食にしている)

夕方に山を下りていって、芋畑の近くに潜伏して日の暮れるのを待ち、日が暮れると直ちに畑に入って芋を掘り、持ってきた天幕に一杯包んで帰る。

此処で終戦を知った。八月の二十日前

後であったと思う。

此処にいたときボソボソからずつと北のレイハン地区にいた野口兵団(浜田編成第八二旅団 旅团长野口少将)本部が国道を越えて南下、当地区に移動してくる事になったように、木暮支隊は又南部に移動することになった。

戦隊が此処を離れるとき、病人や負傷者等行軍について行けないと思われる者を残した。九戦隊では一中隊の中西、西巻、二中隊は村井、渡辺達他に十戦隊の奥中達(もつといたと思うが思い出せない)で、後日、彼らは九月十三日に野口兵団の主力と共に米軍に投降したと聞いた。

ルイシアナ東方山地にて

行程約五泊くらいで目指す地区に到着した。

着いた所はどこか地名は分からなかった(後で投降した時、その地名がルイシアナと分かったから此処はルイシアナ東方山地であろう)

広く開墾されていたところで、カモテ畑等は原住民が立ち退いた後日本兵が全く荒らしていないようで、安全なところで且つ自由に採ることができた。全く桃源郷のような所であった。

此処で二群が大発見をした。私達の宿舎近くの川の上流に米倉があって、大量の籾が隠されているのを発見したのだ。

木暮支隊本部や戦隊の各中隊に分けられた。どのくらいであったかは、はっきり覚えておらないが、多分米ばかりを食べるのも何か月かはあるだろうと思われるほどの量であった。

何ヶ月ぶりかで米の硬い飯が食べられた。又、ここで昼飯も食べられるようになった。栄養不良であったが、元気な身体を取り戻せそうであった。

然しもう戦争は終わっていた。木暮支隊は九月十三日に米軍に降伏と決まった。

籾は残して行った。

降伏

九月十三日私達木暮支隊は於保少尉持つ白旗を先頭に、一本道を降りた。部隊名は分からなかったが、周辺の兵士達も合流し二、三百人の集団となっていたと思う。

途中の道路上で枯れ木を倒して道路を閉鎖し、現地人の若者が立っていた。於保少尉が二言三言現地人とやりとりをしていたが、彼は後ろを何度も振り返りながら米軍に報告するべく駆けていった。しばらくして、肩に機関銃を掲げた米軍の兵士が一人手を振りながらこちらに向かってきた。(後で分かったが、彼は中尉でこの地区の隊長であった。部下も連れず、たった一人でやってくる米軍将校の身軽な行動に感心した。)木暮支隊長はこの米軍兵士と直接流ちょうな英語で

会話をしていた。私はこれを見て、戦前に陸士を卒業した人は流石に教養が備わっていると感じた。この後の米軍兵士に従って山を降り彼の指示により武装解除を受けた。

大切に持って来た銃や軍刀が無造作に山積みされた。

昼食に米軍のレーション（携帯食料のこと）を支給された。一人に二個の缶詰が支給された。一個の缶詰にはビスケットや菓子類等、他の缶詰は豆、牛肉、シチュー等数種類があった。こんな旨い物を食べて戦争をしている米軍にはとても勝てないと思う。夕刻になって、米軍のトラックが来た。

トラックにてラグナ湖南部のカランバの捕虜収容所に送られた。途中で他の部隊の投降者のトラックと合流したので長い列になった。トラックの行列は夜間になつたが、沿道の両側に現地人が一斉に並んで見物をしていて、こちらに向かって「バカヤロー」とか「ドロボー」とか叫んだり、手で首のあたりを斬る仕草をしている者もあり、石をぶつける者もいた。各トラックには武装した米兵が一名乗っていて警護にあたってくれた。

日本兵がこれほど憎まれているとは思わなかった。

捕虜収容所にて

ケソン州ルイシアナにて武装解除を受

け、収容所に送られたが、ここではまず総ての持ち物を捨てさせられた。他部隊の人で、重要書類のような物を大切に持った人もいたが、すべて取り上げられていた。

それから将校と下士官・兵とを別々に分けられた。

収容所では戦時中に捕虜になつた人が様々な役を受け持つて働いていた。炊事などは全部そのような人がやっていた。彼らはまるまると肥えていてすぐに分かった。

私達は終戦後、軍命により投降したもので、捕虜とは思っていなかったが、米軍にとつてはそんなことはどうでもよかったのである。

捕虜収容所に入つて数日後に米軍の作業服を支給され、それに着替えた。背中に大きくPW (Prisoner of War: 戦争の囚人) とペンキで書かれてあつた。

収容所の食事は全くひどい物であつた。朝昼晩と三食を支給されるが、食器の底が透けて見えるほどの薄いお粥でとても腹の足しにはならなかつた。多分アメリカから送られる米が間に合わなかつたのであるうと思われる。(日本なら現地調達と言つて、半ば強制的に食料を徴発するところであるが、アメリカはそれをしてない)

お陰で、ルイシアナの山中にいたとき

少し良くなりかけていた栄養不良が又ぶり返した。

捕虜では下士官・兵は毎日作業に出なければならなかつたが、とても作業の出来るような状態ではなかつた。我々の代表者が今の食事ではとても作業が出来ないと申し出たが、米軍の監督将校は「事情は分かっているが決まつたことはやらなければならぬので、作業は腹の減らないようにゆつくりすればよい」と比較的物わかりが良かった。

これが逆であれば日本の将校がこんな物わりのよい事が言えるかどうか、こんなところも比較して感心したことであつた。

又、私達捕虜も「米兵に会つたら敬礼をしろ」と命じられた。「こんな米兵に敬礼なんかするものか」と思っていたが、一度通りがかりに米兵に敬礼をしたところ、きちつと不動の姿勢をとつて答礼をしてくれた。

普段は将校と兵が会話をしているときでもチュウインガムを噛みながらだらしない姿勢で、友達同士で話している様子なのに、一介の捕虜が敬礼したとき答礼をこんなにきちんとした態度で交わされるのに、米軍でも一筋のバックボーンがあるように思えた。

一つの収容所には中隊がいくつあつて、はじめに下士官と兵の階級別に分け

られ、三十人位が班の単位で、それが五つ位で一ヶ中隊であった。我々下士官の收容されている中隊では中隊長は最上位の准尉であった。收容所では、苗字のローマ字の頭文字のアルファベット順に班が編成された。(アルファベット順に編成された理由は、戦犯者の呼び出しに都合がよいからであると云うことを、戦後大分経ってから気付いた。それは、戦犯容疑者(原住民に対する暴行や、略奪をした者)の名前を知っている原住民の申し立てがあれば、その苗字の者をまとめて呼び出し、首実検をするのに都合がよいからであった。)何故か分からないが、何回か編成替えが行われた。私達は投降したとき最初は同じ隊の者が固まっていたが、段々離れ離れになり、最後は私と一緒にあったのは西村(二群)と中澤(戦隊本部)だけになった。

復員

私は比較的早く、二十年の十一月十五日復員したが、西村は翌年の六月になつてようやく帰国できたそうである。

復員の時は、日本の海防艦が二隻、大砲等の装備を外したのが迎えに来てくれた。マストに翻翻と翻る日章旗を見たとき、思わず涙が出た。海防艦に乗ったとき、海軍の黄色い軍服を支給されたので、今迄のPWの作業服を捨てた。又海防艦でやっと日本の硬い飯が支給された。比島に来るときは一ヶ月以上もなかったのに、帰りは一週間で鹿児島県加治木港についた。再びは見ることを諦めた日本山河、船上から見た懐かしい景色を眺めて再び涙が出た。復員手続きを終わって、九州から大阪へ帰るのに、二日間かかった。途中広島駅で列車を乗り換えたが、広島は原爆のため一面に焼け野原になっていた。家に帰ったとき、母達は「きよとん」としていた。比島に行っていたのにこんなに早く帰ってくるとは思ってもいなかった。それでも私が食べるものも不十分で、比島の山中で闘っていた事を話すと漸く喜んでくれた。帰国したとき銭湯で体重を量ったら十一貫(四一キロ)しかなかった。帰国後まもなく若干の人が「自分の息子や主人が比島に行つてまだ帰つてこないのだからどうしているのか心配です。お判りなら教えてほしい」と云う問い合わせ

に來られたが、帰国当時は比島全体の状況については全く無知であったので、残念乍ら何もお答えできなかった。帰国後中川や中西達とは一度文通したことがあったが、お互いに忙しかったのか、その後御無沙汰したまま、昭和四二年まで会うことが出来なかった。

再会・小豆島にて

元特幹隊本部に居られた中岡重成氏(大尉)と、一期生で元第二戦隊(沖繩配備)の儀同保君の呼びかけで、昭和四二年八月に懐かしの小豆島にて「特幹隊をしのぶ会」が催され、連絡の取れる者に会の通知があった。私達戦場から生還した者にとつて戦後二十二年ぶりの懐かしい再会で、話し合ひは尽きず感慨ふかい一日であった。

中西、中川(旧姓西村)、鈴木や戦隊本部の後藤(旧姓山田)とも再会し、お互い無事を喜び合った。

書き終わって

以上が、私の戦時中の行動経過である。僅か一年半の軍隊生活であったが、特に内地を出てから終戦までの一年間は、その後の十年以上にも匹敵する程長く感じられ、その間の出来事は、戦後七十年経つた今でもまざまざと記憶している。(最近寄る年波か細かいことを忘れるようになった、時間ができたので思いだしながら記録することにした。) 以上

甲飛15期土空24分隊名残の会のお知らせ
甲15土空24分隊 菅原謙吾

“若い血潮の予科練の”の軍歌に憧れただけではないが、横須賀海軍工廠で働き、連日米軍機の攻撃で損傷した艦・船の修理に追いまくられて居る自分に何か

情なく思っていた時、「甲種飛行予科練募集」が目に入り、「これだ」と応募し、無事合格した。

昭和19年9月、3200名の仲間とともに入隊、教育・訓練を重ねて1年足らず、昭和20年8月の敗戦を迎え空しく、焦土と化した古里に帰された。

戦後、それぞれの道を歩む中、「予科練ボケ」とか「特攻くずれ」と蔑まれながら、歯をくいしばり懸命に働いていた時、土空24分隊の有志が「甲飛15期の会」を22年ぶりに熱海で立ち上げた（昭和47年2月22日）

私に24分隊の案内が届いたのは、昭和49年の長野大会で168名の同期の桜が集い、4半世紀の時を超え、予科練に戻り、涙を流し抱き合う姿を目の当たりに感動した。

その後、全国各地の特攻縁の地で会を重ね、北は北海道から鹿児島まで、先輩

の戦跡を訪ねた。その中で特に、谷田部航空隊で見送った特攻隊員の碑が、鹿屋航空隊に建って居り、出撃の前夜、消灯時間後に古里の後輩に語りかけ、翌早朝谷田部全隊員の見送る中、南の空に飛び立った勇士は、今も鮮明に眼に浮び忘れられない。

平成22年、みな80半ばを超え、集まれる者も少なくなつたので、28回続いてきた会を閉めようと、東京のホテルで「解散会」を行い長い交流の「お別れの会」となつた。

名残の会

それから5年、予科練24分隊の生存者から電話があり、「貴様元気か、俺もまだ元気だ。よかつたらお前の所に行くから、元気な者だけでも集まろう。名称はどうでもいいが、『名残の会』にしよう」会員に呼びかけたら、予科練2名、意外にも遺族（未亡人）と家族の参加者が集い、華やかな会として再スタートした。鶴岡、花巻、土浦と会を重ね、最終会を考えていたら「札幌への飛行機の旅は無理」と言われた東京の24分隊の副会長のため最終会は東京でとの提案があつた。

折角の東京なら
「令和2年3月28日（土）靖國神社

第41回特攻隊全戦没者慰霊祭 参列
令和2年3月28日
グランドヒルホテル
第6回 戦友会 名残の会
で行いたいと、企画している。

「名残の会東京会」幹事

- 1 大平 豊（前24分隊副会長）
東京都渋谷区代々木2丁目32-6
TEL 03-3370-2730
- 2 飯田清子（グランドヒル名残の会）
茨城県稲敷郡阿見町中央2-16-51
TEL 029-887-1752



赤トンボ郷土訪問飛行

第一空挺団研修に参加して

会員 池田 康博

令和元年十一月二十二日(金)、特攻隊戦没者慰霊顕彰会が企画した陸上自衛隊習志野駐屯地の第一空挺団研修に参加した。

第一空挺団とは、いわゆる「落下傘部隊」で精鋭を誇る陸自最強の部隊だそう。具体的な計画の策定・調整は岡部理事(元第一空挺団長・元陸上幕僚長)が担当した。参加者は、顕彰会の役員、評議員の他、会社員や自営業から主婦まで一般会員の総勢25名、年齢構成も36歳から69歳までの多彩な顔ぶれとなった。当日は生憎の雨模様であったが、朝9時50分に京成線の北習志野駅前に集合し、部隊が用意したバスで駐屯地に入った。以下、行動表に示す計画に従い研修した。

一 跳出塔体験

駐屯地講堂で駐屯地と第一空挺団の概況説明を受けたのち跳出塔に向かった。跳出塔とは、輸送機等からの落下傘降下を、地上11mの高さから跳出するという動作を行う訓練施設である。11mの高さは人が最も恐怖を感じる高さだそう。その塔を前にして、指導官から、「辞めた人は遠慮なく申し出てください」とい

第1空挺団研修行動表

時間	項目
1030~1100	概況説明
1115~1230	跳出塔体験
1230~1320	昼食
1330~1420	訓練・施設見学
1430~1520	落下傘整備工場見学
1530~1630	空挺館見学

う言葉があつたが、私を含めて、事ここに至ってはどうか、その場の空気と言おうか、「辞めたい」と言う人はなく、結局、まだ決心のつかぬままであった希望者も含めて23名全員が跳ぶこととなった。隊員による見事な跳出し訓練の展示を見学してから、全員、雨衣とヘルメットを着用し、再び塔の下に集合して準備運動の後、5班に班編成が行われた。ここで私は第3班の一番目ということになった。

跳出し体験は、1班から順に、まず地上の施設で跳出し動作の流れを学ぶことから始まった。指導役の隊員から私達の3班が呼ばれ

跳出塔から決死?のジャンプ



塔の階段を上り、前の班が終わるまでの待機中は、心臓が高鳴っていたが、準備が整い、いざ出陣となったら不思議に

ると、「オー」「オー」とその都度返事をするのだが、「声が低い!」とやり直しさせられたので、次の「姿勢をとれ」の号令では「一、二、三、四」と大声を出しながら、一で右手を左胸に、二で左手を右胸に当て、三で顎をぐっと引き、四で右足を跳出し口から靴先が出るくらいに踏み出して、「用意、降下」の声と、彼が靴をドンと踏む強い音と同時に跳出すという動作を行った。そして、いよいよ順番が来た。

落ち着いてきて、「オー」「オー」と返事をしながら、手順通りに「一、二、三、四」と大きな声を出して、そして、やはり大きな声で名前と出身県を叫んだあと、「ドン」という靴音と同時に跳出した。跳出した後は、アスレチック場の「人間ロープウェイ」よろしく、ぶら下がったまま緩やかに土手に向かって下り降りた。結構怖がりの私ができなかったのは、部隊や隊員に対する信頼感があったからとは思いますが、「大きな声を出す」ということで恐怖心を打ち消すことができたのではないか。「気合だ！」もまた大事と思っただころである。

跳出塔体験がすべて終わった後、食堂で昼食を摂った。

二 訓練施設見学

昼食後、災害派遣や総合火力演習等で見ると、ヘリコプターからロープで降下する訓練のリペリング降下と、太いロープを使つての降下訓練の模様を見学した。気を抜けばすぐ事故につながる訓練で緊張した空気が漲っていた。真剣に訓練している隊員の姿に、思わず「日本の平和は皆さんのお蔭です。ありがとうございます」と、参加していた女性が深々と頭を下げて一礼する姿が印象的だった。



落下傘装着体験 ウー重い！

三 落下傘整備工場見学

次に、空挺隊員の命を守る落下傘の整備工場を見学した。落下傘の、手際のよい畳み方実演と、完全に折り畳むまでには1時間もかかるといふ大変な作業であるとのこと。また、誰が担当したか責任の所在を明確にするため作業表に捺印するというのも、これが命に係わる作業であることを実感させる。また、落下傘は重量もかなりあるもので、実際に装着体験も行った。

パレンバン製油所の降下作戦で戦死した長谷部少尉が書き残した「もろとも死なるといふむつものは、どくろの朽つまで つとめつくすと」という額があったが、まさにこれが「空挺魂」なのであろうか。館長の話に、『例えば火災現場において、消防隊員や警察官なら身に危険が迫った時に「下がれ！」と言うが、



四 空挺館見学

空挺館は、習志野原の歴史から明治天皇、三笠宮殿下や騎兵隊に係わる展示品や、旧陸海軍の空挺部隊に関する資料が展示されている。

特に、印象に残ったのは、空挺部隊に関する展示室に掲げてある「挺身赴難」という大きな額である。これは身を呈して困難に立ち向かうという意味だそうで、空挺部隊の精神を表わしているという。



義烈空挺隊隊長 奥本道郎大尉の遺書



空挺館を見学する参加者

空挺はその時「前へ！」と言う。』とあったが、空挺の精神がよく理解でき、今も自衛隊の空挺隊員に受け継がれているものと確信した。

また館長から、空挺作戦は大東亜戦争中にメナド降下作戦やパレンバン、クワン降下作戦など幾つかあったが、唯一、特攻作戦だったのが義烈空挺隊による沖縄本島の飛行場への空挺特攻だったとの説明があった。

その義烈空挺隊隊長、奥本道郎大尉が

両親に宛てた遺書には、「・・・御垣の守りとして敵航空基地に突入いたします。絶好の死に場所を得た私は、日本一の幸福者であります。只々感謝感激のほかありません。・・・道郎は喜び勇んで往きます。」と綴られている。また、奥本大尉の「挺進殉国」という遺墨も展示されている。なんとという覚悟の言葉であるうか。

「挺進赴難」といい、「挺進殉国」といい、空挺隊員にとっては、通常の降下作戦も義烈の特攻も戦地に赴くその気持ちにおいて、変わりはないのかも知れないと思った。

総合所見
 生来臆病な私も、跳出塔体験でちよっぴり度胸がついたかもしれない。しかし、訓練施設は他にも多くあり、実際に飛行機から跳び降りるまでには、様々な訓練を重ねていることが分かった。この日も輸送機を模したC-2訓練台やCH-47訓練台では、隊員が繰り返し、繰り返し跳出し動作を行っていたし、リペリング降下を黙々と行っている風景も見学した。幾つもある基本の動作、諸訓練の繰り返しの結果、精強な空挺隊員が誕生するのだろう。

空挺館では先の大戦で、彼らが如何に戦ったか、その精神はどのようなものであったかを強烈に物語ってくれている。それは日本人が決して忘れてはならないものであるし、語り継いで行かなければならない誇りある日本人の事績である。是非、多くの一般の人にも見てもらいたいと思った施設である。但し、空挺館の一般開放は概ね一か月に1回程度であるため、ホームページ等で確認する必要がある。

新刊図書紹介

改訂新版

『鉛筆部隊と特攻隊（近代戦争史哀話）』

本書は、平成24年7月に刊行された「鉛筆部隊と特攻隊」を、7年の時を経て改訂新版として出版されたものである。著者は、きむら けん氏

「鉛筆部隊」とは、大東亜戦争の敗色も濃くなった昭和19年8月、東京世田谷から長野県松本市外の浅間温泉に集団疎開した代沢小学校の学童に、引率の柳内先生が「武器の代わりに鉛筆をもって戦う」という意味で鉛筆部隊と名付けたことによる。先生は、作文はなによりも書き慣れることが一番大切という考えから、子供たちに作文をどしどし書かせた。「子供たちも、鉛筆を持って戦っていた」のである。

この浅間温泉に、昭和20年2月の末、特攻隊員が宿泊した。彼等は満州から松本飛行場にやってきた武剋隊と武揚隊であった。特攻隊員は約40日間を浅間温泉で過ごし、再び九州方面に向けて飛び立ち、やがて、沖繩近海の米軍艦船に体当たりを敢行し戦死した。

実は特攻隊員の浅間温泉滞在中、鉛筆部隊の学童との間には互いに交流、心の

ふれあいがあったのであるが、しかし、軍関係の記録は、敗戦により焼却され、どのような部隊の誰が、何処に宿泊し、何時飛び立っていったのか、全く分からなかった。ところが、鉛筆部隊の子供たちが書いた作文、親に宛てた手紙やハガキにその様子が記述されていたのである。

きむら氏は、子供たちが書いていた事実を丹念に収集し、当時学童だった生存者や関係者を訪問したり、或いは連絡先の手紙や電話、メールなどで問い合わせたりして、当時の浅間温泉での子供たちと特攻隊員の交流を詳細に浮かび上がらせた。さらに、初版から7年の年月が経過する中で、新たに判明したこと、亡くな

る書き加えられている。このことはまた、埋もれた事実を発掘し記録して、後世に語り継いでいくことの大切さを改めて認識させてくれる一冊である。

平成30年9月に催行された、世田谷山観音寺と特攻隊戦没者慰霊顕彰会共催による第67回特攻平和観音年次法要において、

来賓として挨拶された保坂展人世田谷区長は、浅間温泉におけるこの事実を紹介され、「一人一人の貴重な声や経験を繰り返し伝えることこそが、間違いなく世代を超えて語り継がれることに繋がると信じて疑わない」と述べられた。

世田谷区在住の当顕彰会の会員であるご遺族に関する記述もある。出版元は「えにし書房」、定価は「二千円＋税」、当顕彰会の「特攻ライブラリ」に所蔵しており貸出もしている。

(文責 事務局 池田)



連載山ある記9 東京都「青梅アルプス」

会員 池田 康博

「青梅アルプス」とはJR青梅線の軍畑(いくさばた)駅から青梅駅までの6駅に沿った全長約11kmの山稜を言うらしい。最も高い山は雷電山で標高四百九十四m、十一月下旬、晩秋の山歩きには、程良い高さで、軽い縦走感も味わえるのではないかと出かけた。

JR軍畑駅で下車して、8時55分に出発、線路沿いの小道を青梅方面に少し戻って線路を渡り、国道百九十三号に出て榎峠を目指して歩く。途中、私も嘗て登った高水三山への分岐があり、ここまで歩いてきた数組、数人の登山者の全員がこちらの方に向かったため、榎峠方面は他に誰もいなくなつた。

国道を歩くこと約30分で榎峠に着いた。ここから山に入っていく。いきなりの急登であるが、整備された階段状の道を登ること約25分で、本日の最高到達点である雷電山に着いた。

小休止の後、先に進む。ここからは起伏の多い尾根道になる。途中の辛垣山(からかいやま)には、中世の山城という辛垣城址があるので、寄ってみようと登山道から逸れて入ってみたが、すぐに道がはっきりしなくなつたので引き返した。元の登山道に戻ってしばらく先に進



始めた。戦国末期に八王子の北条氏照に攻められ落城、城主三田氏は岩槻城に落ちのびたが、その地で自害したこと。軍畑という地名はその時、このあたりが戦場となつたことから名付けられたこと。更に、城を守るための砦があつたという近傍の山や、辛垣城の石垣は再利用のため持ち出されたため史跡としての価値を失つた事。終いには、今朝発見して撮つたという二ホンカモシカの写真を見せられ、結局、この長話もあつて城址には行

かずに先へ進んだ。11時11分には三方山を通過、徐々に登山道も広くなり、日向和田駅への分岐点からは林道のような整備された道になつた。それもそのはずで、地図上には、ここから青梅駅まで「青梅丘陵ハイキング

むと、再び辛垣城址への案内板が出てきたので、立ち止まって見ていると、雷電山までのコースをいつも歩いていて、という老人が声をかけてきて、辛垣城の歴史について語り



結局、「青梅アルプス」と言えるのは、起伏があつた雷電山から三方山までの間だな、と自分を納得させつつ、終点の青梅駅にほど近い永山公園に着いたのは12時30分であつた。ここでゆっくり昼食をとって青梅駅から帰途に就いた。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



- 喪服列 蟬時雨哭く 杜へ消ゆ
- 参道に 子らの名前の 盆提灯
- いつもいつも 涙は重き 終戦日
会員 新倉久男
- 青空に 飛び征く君の 雲の跡
淳
- 征きますと 南に向かう若櫻
笑顔で飛びし 君を忘れじ
淳子
- また一つ 歳を重ねる 除夜の鐘
よみびとしらず



- 乾杯と献杯混じる同期会
- 天空を切り取る冬の大三角
- いの一番エンジン前の猫バンバン
井下駄マスオ

事務局からの報告等

一 平成31年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告

昨令和元年11月25日(月)に、当顕彰会事務室において第3回理事会が、12月12日(木)に、第1回臨時評議員会が、それぞれ開催され、令和2年度事業計画及び収支予算(正味財産増減予算書・案)が審議され、いずれも令和2年度計画として承認されました。
なお、令和2年度事業計画の骨子は次のとおりです。

- (1) 慰霊祭の実施
 - ア 慰霊祭(三月二十八日(土))
 - イ 年次法要(九月二十二日(祝))
 - (2) 他団体慰霊祭への参列・協力(一月号参照)
 - (3) 会報の発行
 - (4) 特攻隊に関する資料収集調査及び関連出版物に関する事業
 - (5) 特攻勇士の像建立奉納事業
- 収支予算(正味財産増減予算書)は別掲のとおり。
また、令和2年度の当顕彰会の理事及び評議員は、次のとおりです。

理事等	杉山 蕃
会長	藤田 幸生
副理事長	岩崎 茂
専務理事	
兼事務局長	石井 光政
業務執行理事	水町 博勝
業務執行理事	小倉 利之
理事	白田 智子
理事	鮎田 英一
理事	大穂 園井
理事	岡部 俊哉
理事	久納 雄二
監事	阿部 軍喜
監事	羽瀨 徹也
評議員	
秋山 政隆	福江 広明
及川 昌彦	倉形 桃代
新垣 敬輝	宮本 雅史
太田 兼照	早川 雅彦
深山 明敏	長瀬 彰孝
原島 淳子	高松 真希
原 知崇	岩成 真一
永井 昌弘	

二 第41回特攻隊全戦没者慰霊祭の開催について

第41回慰霊祭は、令和2年3月28日(土)11時から執り行います。なるべく多くの方とご一緒に特攻隊の英霊に哀悼と感謝の誠を捧げたいと思います。会員以外の方でも参列できますので、お誘い合わせの上、御参集ください。

慰霊祭の細部については、同封の案内書をご覧ください。参列される方は、同じく同封の「郵便払込取扱票」(会費納入用紙兼用)にご記入の上、お申込みください。

三 令和2年度年会費納入について

当顕彰会の会計年度は、1月1日から12月31日までです。同封の「郵便払込取扱票」により令和2年度の年会費をお納め下さるようお願い致します。
なお、この「郵便払込取扱票」は、慰霊祭参加申込書も兼ねていますので、慰霊祭に参列される方は、この取扱票をご使用になり、同時にお払込み下さるようお願い致します。(既に本年度分の年会費を納められている方は、当該欄を二重線で抹消してあります。)

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
令和2年度 正味財産増減予算書

令和2年1月1日から令和2年12月31日まで

(単位:円)

科 目	2年度予算	元年度予算	元年度見込	対前年予算増減	備 考
I 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	12,640,000	10,400,000	14,213,000	2,240,000	
② 特定資産運用益	280,000	280,000	550,000	0	
③ 年会費	3,500,000	3,800,000	3,464,000	△ 300,000	1' 参考
④ 慰霊事業益	2,250,000	2,400,000	2,249,000	△ 150,000	1' 参考
⑤ 出版事業益	80,000	30,000	86,000	50,000	1' 参考
⑥ 受取寄付金	4,100,000	4,500,000	4,070,000	△ 400,000	1' 参考
⑦ 雑収入	0	0	10,000	0	
経常収益計	22,850,000	21,410,000	24,642,000	1,440,000	
(2) 経常費用					
事業負担金	780,000	910,000	780,000	△ 130,000	
像制作委託費	1,320,000	1,840,000	918,000	△ 520,000	
発送等委託費	3,780,000	3,820,000	3,948,000	△ 40,000	
他団体助成費	1,970,000	1,900,000	1,984,000	70,000	
役員報酬	300,000	400,000	300,000	△ 100,000	
給料手当	5,710,000	5,503,000	5,708,000	207,000	
福利厚生費	881,000	802,000	882,000	79,000	
旅費交通費	3,578,000	3,420,000	3,633,000	158,000	
通信運搬費	672,000	518,000	518,000	154,000	
減価償却費	32,978	2	5,496	32,976	
消耗品費	860,000	764,000	842,000	96,000	
印刷製本費	4,193,000	996,000	936,000	3,197,000	
会議費	197,000	220,000	196,000	△ 23,000	
光熱水料費	137,000	142,000	137,000	△ 5,000	
賃借料	3,250,000	2,863,000	3,243,000	387,000	
諸謝金	200,000	170,000	195,000	30,000	
臨時雇賃金	400,000	864,000	760,000	△ 464,000	
経常費用計	28,260,978	25,132,002	24,985,496	3,128,976	
評価損益等調整前経常増減	△ 5,410,978	△ 3,722,002	△ 343,496	△ 1,688,976	
基本財産評価損益等	0	0		0	
特定資産評価損益等	0	0		0	
当期経常増減額	△ 5,410,978	△ 3,722,002	△ 343,496	△ 1,688,976	
2 経常外増減の部					
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯藏品資産受入	0	0	0	0	
資産計上	0	0	170	0	
投資活動収益計	0	0	170	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
貯藏品除却損	0	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	170	0	
当期一般正味財産増減額	△ 5,410,978	△ 3,722,002	△ 343,326	△ 1,688,976	
一般正味財産期首残高	283,319,131	283,217,575	283,662,457	101,556	
一般正味財産期末残高	277,908,153	279,495,573	283,319,131	△ 1,587,420	
II 指定正味財産増減の部					
一般正味財産から振替	0	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	0	
III 正味財産期末残高	277,908,153	279,495,573	283,319,131	△ 1,587,420	



会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <http://www.tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7
東専堂ビル2階
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4596
E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp